

福岡城跡

15

— 城内整備に伴う確認調査および中堀の緊急調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1005集

2008

福岡市教育委員会

福岡城跡

15

— 城内整備に伴う確認調査および中堀の緊急調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1005集



遺跡略号 FUE-24・33・34・40・46
調査番号 9353・9561・9617・9751・0064

2008

福岡市教育委員会

序

福岡城跡は、福岡藩初代藩主黒田長政が、慶長6(1601)年から7カ年をかけて築城した近世城郭です。その惣構えは、荒津から長浜にかけて新たに埋め立てて作った城下町を含んで、西は室見川から、東は那珂川までの範囲を取りこみ、広大な領域を有していました。中世以来の自治都市である博多とは、那珂川を挟んで対峙し、江戸時代の長い歴史を織り込みながら近代を迎えますが、福岡城跡が本市固有の都市形成のあり方や文化醸成に深い影響を与えていることは否めません。

そういった意味で、福岡城跡は将来に向けて保存・整備し、正しい歴史認識を育むための適切な活用が必要であります。

本市ではこの観点から、昭和62(1987)年末の鴻臚館跡の発見を契機に策定された「舞鶴城址将来構想(中間とりまとめ)」の趣旨を踏まえながら、国指定史跡地内では、現状変更ともなう内容確認調査や石垣や櫓等の現存する城郭遺構の整備や修復を行い、また、指定地外においても各種開発に伴う緊急発掘調査を行い記録保存に努めています。

本報告書は、福岡城跡の史跡指定地内で行われた公園環境整備に伴う内容確認調査と埋蔵文化財包蔵地として登録されている中壙の民間開発に先行して実施した緊急調査報告であり、いずれも、今後の福岡城跡の保存と整備、活用にとって重要な成果が得られました。

本報告書が福岡城跡をはじめとして、本市の文化財保護に対するご理解とご認識の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査から本報告書作成までの間、関係各位には多くのご協力とご理解をいただきました。記して深甚なる謝意を表します。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕 嗣

例 言

1. 本書は、国庫補助を受け平成5年～8年度に実施した国史跡福岡城跡内の確認調査と、平成12年度に実施した埋蔵文化財重要遺跡福岡城中堀跡の緊急調査報告書である。
2. 本書で用いた地図は、図2が国土地理院発行の5万分の1地形図「福岡」、図3が福岡市都市計画図 NO60・61・71・72である。
3. 本書での方位は平面直角座標系第Ⅱ座標系(日本測地系)によっており、磁北は真北方位から6°40'西に偏する。なお、座標値は各調査年度当時のままであり、補正は行っていない。
4. 本書の第3章については、横山邦雄が執筆・編集した。
その他の第1章・第2章については田中壽夫が執筆・編集した。
5. 発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに收藏されている。

本市が刊行した福岡城跡関係の発掘調査報告書シリーズ番号は下記の通りである。

シ-ズ 番号	報告書 番号	刊行年	書名および副題	発行者
		1964	史跡福岡城跡発掘調査概報 福岡県文調報第31集	福岡県
1	59集 59集	1980 1990	筑前国福岡城跡ノ丸御蔵屋敷 筑前国福岡城三ノ丸御蔵屋敷 一図録編一	福岡市 福岡市
2	101集	1983	高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ 一福岡城址 内堀外壁石積の調査一	福岡市
3	131集	1986	福岡城肥前堀 一市庁舎建設に伴う埋蔵文化財の調査一	福岡市
4	237集	1991	福岡城跡・IV 一内堀内壁の調査一	福岡市
5	293集	1992	福岡城肥前堀第3次調査報告	福岡市
6	294集	1992	福岡城肥前堀第4次調査報告	福岡市
7	316集	1992	福岡城月見橋	福岡市
8	415集	1995	福岡城跡 第23次調査報告	福岡市
9	463集	1996	福岡城赤坂門跡 福岡城跡第26次調査報告	福岡市
10	498集	1997	福岡城跡 福岡城中堀跡の調査	福岡市
11	546集	1997	史跡福岡城跡 東の丸の発掘調査	福岡市
12	772集	2003	福岡城跡大千門 第48次調査報告	福岡市
13	960集	2007	福岡城跡 一第53次調査報告一	福岡市
14	969集	2007	福岡城跡 一潮見橋・時権堂跡に伴う確認調査報告一	福岡市
15	1005集	2008	福岡城跡15 一城内整備に伴う確認調査および中堀の緊急調査報告一	福岡市

※報告書番号は、本市刊行の埋蔵文化財調査報告書番号である。

遺跡名	次数	調査番号	遺跡番号	調査地	調査面積	調査期間
福岡城跡	24	9353	FUE-24	中央区城内5-2	80㎡	1993.12.11～12.21
福岡城跡	33	9561	FUE-33	中央区城内12・18-2	500㎡	1996.3.1～3.29
福岡城跡	34	9617	FUE-34	中央区城内1-4	32㎡	1996.6.21～7.1
福岡城跡	40	9751	FUE-40	中央区城内1-1	152㎡	1997.8.18～9.10
福岡城跡	46	0064	FUE-46	中央区大名2丁目438・443・444-2	166㎡	2001.2.27～3.31

本文目次

第I章 序説	1
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 調査の組織	1
3. 福岡城跡の概要	3
4. これまでの調査	3
第II章 史跡指定地内の確認調査	7
1. 第24次調査	7
2. 第33次調査	13
3. 第34次調査	18
4. 第40次調査	22
第III章 福岡城跡第46次調査	29
1. はじめに	29
2. 調査の記録	33
3. 小結	40

挿 図 目 次

図1 国史跡 福岡城跡全景(南東から)	2	図20 第1～4トレンチ配置、現状土塁平面および	14
図2 国史跡福岡城跡の位置(1/5000)	3	東西断面図(1/400)	
図3 福岡城跡関係発掘調査地点位置図(1/5000)	4	図21 第1トレンチ(南から)	15
図4 本丸跡遠景(南東から)	7	図22 第2トレンチ東壁(西から)	15
図5 調査区位置図(1/2500)	7	図23 第3トレンチ東壁(西から)	15
図6 調査作業風景(北から)	7	図24 第4トレンチから土塁西側をみる(東から)	15
図7 調査区全景(東から)	8	図25 第4トレンチ西壁(東から)	15
図8 遺構平面および土層断面図(1/80)	9	図26 各トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)	16
図9 石垣前面側溝および布基礎跡(南から)	10	図27 各トレンチ出土遺物(1/3)	16
図10 石垣前面側溝および布基礎跡(北から)	10	図28 第1～4トレンチ土層断面および現状土塁	17
図11 建物跡全景(北から)	10	断面図(1/200)	
図12 獨立柱建物柱穴(北から)	10	図29 三の丸南西郭土塁遠景(南東から)	18
図13 建物基礎(部分 西から)	10	図30 三の丸南西郭調査トレンチ配置図(1/2500)	18
図14 出土遺物実測図(1/3・1/4)	11	図31 第1・2調査トレンチ配置および土塁現況	19
図15 出土遺物(1/3)	11	測量図(1/500)	
図16 福岡城本丸の図	12	図32 三の丸南西郭土塁断面図(1/400)	19
図17 三の丸北西郭北面土塁遠景(南東から)	13	図33 第2トレンチ掘削状況(北から)	20
図18 調査トレンチ(1～4)配置図(1/4000)	13	図34 第1トレンチ平面および土層断面図(1/80)	20
図19 潮見櫓跡と北面土塁(北西から)平成5年当時	13	図35 石組側溝(東から)	20

図36 第2トレンチ掘削状況(北から)	20	図54 調査区全体図(1/200)	30
図37 第2トレンチ平面および土層断面図(1/80)	20	図55 東西および南北石垣斜面・断面実測図(1/40) (折込)	
図38 石組側溝(東から)	20	図56 東西及び南北石垣平面図(1/40)	31
図39 各トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)	21	図57 石垣俯瞰(西から)	31
図40 各トレンチ出土遺物(1/3)	21	図58 裏込め部調査トレンチ実測図(1/40)	32
図41 三の丸南西部追廻御門周辺遺景(南東から)	22	図59 調査トレンチ(南から)	32
図42 三の丸南西部トレンチ配置図(1/1000)	22	図60 S E 01井戸出土状況図(1/20)	33
図43 トレンチ配置状況(北西から)	22	図61 裏込めトレンチ内出土遺物実測図(1/3)	33
図44 第1・2トレンチ平面および土層断面図(1/80)	23	図62 裏込めトレンチ整地層出土遺物実測図(1/3・1/4)	34
図45 第1トレンチ掘削状況(南西から)	23	図63 S E 01井戸使用の瓦材実測図(1/4)	35
図46 第2トレンチ掘削状況(南西から)	23	図64 堀埋土内出土遺物実測図①(1/2・1/3・1/4)	37
図47 各トレンチ出土遺物実測図1(1/3・1/4)	24	図65 堀埋土内出土遺物実測図②(1/3)	38
図48 各トレンチ出土遺物1(1/3)	24	図66 東・北壁石垣調査状況(南から)	39
図49 各トレンチ出土遺物実測図2(1/4)	25	図67 東壁石垣裏込め調査状況(西から)	39
図50 各トレンチ出土遺物実測図3(1/4)	26	図68 東壁石垣構築状況(北西から)	39
図51 各トレンチ出土遺物②(1/4)	27	図69 北壁裏込め調査区(西から)	40
図52 絵図にみる追廻門周辺	28	図70 瓦井戸検出状況(西から)	40
図53 調査地点図(1/4000)	29		

表 目 次

表1. 国史跡福岡城跡調査一覧

第I章 序説

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 福岡城跡第24次調査(平成5年度実施)

国史跡福岡城跡の環境整備の一環として、本丸跡の公衆トイレ改築工事(本市都市整備局所管)に先行し実施。遺構の有無、深度および内容確認を目的として平成5(1993)年12月11日～21日(実働7日)に調査を行った。調査の結果を踏まえ都市整備局との協議を行い、確認された遺構については盛土し、工事掘削の最深度を現地表面までとして遺構の現状保存を図り、現状変更許可後平成4年度に工事に着手した。

(2) 福岡城跡第33次調査(平成7年度実施)

三の丸北西郭内に立地する福岡国立病院の移転後(平成7年度移転)の城内園路整備(都市整備局所管)に先行して実施。土塁裾部および土塁の本来の形状を把握し園路整備の平面計画に活かすことを目的として、平成8年3月1日～29日(実働8日)にかけて調査を行った。裾部の確定までには至らなかったが、土塁の現状保存を優先し、現状地表面上に盛土し、簡易アスファルト舗装による園路整備工事が現状変更許可後、平成9～10年度にかけて実施された。

(3) 福岡城跡第34次調査(平成8年度実施)

三の丸南西郭は城内住宅街となっており、中長期的計画の下で都市整備局が所管する移転事業が進められている。住民自治会からの要請を受け、都市整備局により仮設駐車場整備が土塁に接して計画された。工事によって土塁遺構の掘削・消滅の可能性があるために、平成8年6月21日～7月11日(実働6日)にかけて遺構の有無、包蔵深度、内容確認を目的として発掘調査を実施した。その結果、確認された近代の遺構については盛土保存を行い、また、土塁裾部に接する部分については一部設計変更の上、現状変更許可後、駐車場整備が行われた。

(4) 福岡城跡第40次調査(平成9年度実施)

三の丸南西郭には、大堀と内堀を結び位置に福岡城の掘め手にあたる追廻御門、追廻橋が所在していたが、戦後になって堀の埋め立てや城内道路の新設、菖蒲園の整備などの結果、城跡としての本来の景観はほとんど失われている地区である。昭和55年2月に「6号濠」が追加指定され、現状で保存されてきたが、環境整備の一環として濠内壁の護岸整備が計画されたことを受けて、事前に遺構の有無、保存状況を確認するために平成10年3月2日～3月20日(実働8日)に実施した。調査の結果確かめられた石垣を盛土保存の上、当初の護岸計画線よりも堀内側に設計変更し、現状変更許可後、工事が実施された。

以上の事業は、いずれも史跡指定地内の現状変更許可申請を受けて実施したものである。

(5) 福岡城跡第46次調査(平成12年度実施)

本調査の調査に至る経緯と経過については、第Ⅲ章を参照されたい。

2. 調査の組織

各調査実施年度における調査体制は以下のとおりである。

(1) 平成5年度(調査主体 教育委員会文化財部文化財整備課)

調査総括 文化財部長 後藤 直 文化財整備課長 古西憲輔
 調査担当 文化財整備課 田中壽夫 瀧本正志
 庶務担当 管理係 後藤晴一(係長) 菅原善則 林 国広

- (2)平成7年度(調査主体 教育委員会文化財部文化財整備課)
調査総括 文化財部長 後藤直 文化財整備課長 柳田純孝
史跡整備等担当課長 塩屋勝利
調査担当 力武卓治 田中壽夫
庶務担当 管理係 後藤晴一(係長) 林 国広
- (3)平成8年度(調査主体 教育委員会文化財部文化財整備課)
調査総括 文化財部長 後藤直 文化財整備課長 柳田純孝
史跡整備等担当課長 塩屋勝利
調査担当 田中壽夫
庶務担当 管理係 陶山能成(係長) 林 国広
- (4)平成9年度(調査主体 教育委員会文化財部文化財整備課)
調査総括 文化財部長 平塚克則 文化財整備課長 柳田純孝
史跡整備等担当課長 塩屋勝利
調査担当 田中壽夫
庶務担当 管理係 陶山能成(係長) 林 国広
- (5)平成12年度(調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財課)
調査総括 文化財部長 柳田純孝 埋蔵文化財課長 山崎純男
調査第2係長 力武卓治
調査担当 横山邦継 常松幹雄
庶務担当 文化財整備課管理係 宮川英彦



図1 国史跡 福岡城跡全景(南東から)

3. 福岡城跡の概要

福岡城は、福岡藩初代藩主黒田長政によって、慶長6(1601)年から7年をかけて築城された平山城である。赤坂山から博多湾に向かって北へ延びたいくつかの尾根や、その間の小さな谷を埋め立てて平坦面を造成し、本丸を中心として東西に長く展開する独特の城構えとなっている。惣構としては、西は室見川から、東是那珂川までの範囲を取りこんだ広大な領域を有しており、そのうち城郭部分と内堀を一部含んだ約48haが昭和32年8月29日付けで国史跡として指定されている。

外郭の南側は、丘陵尾根を大きく切断し堀を設け、北側は遺浅の涌を埋め立てて、荒津から長浜にかかる一帯に城下町を作った。西側は大きく湾入した草ヶ江の入り江を大堀とする一方、東部には肥前堀、中堀を構え、中州・那珂川を挟んで、中世以来の商業自治都市である博多と対峙していた。

城内は、天守台、本丸、二の丸、三の丸の4層の郭で構成され、時櫓や潮見櫓をはじめとする47ほどの櫓が要所を固めていたといわれている。

現存する城郭遺構は、各郭に残る石垣、土塁、門跡、階段の他、国指定重要文化財の南丸多聞櫓をはじめとして県指定の伝潮見櫓、崇福寺仏殿(潮見櫓・花見櫓)、山門(本丸表御門)、祈念櫓、大手門(下の橋)があるが、城郭としての景観を損なっている現状であり、総合的な環境整備が待たれる。

4. これまでの調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成17年度末までに57地点(内2件は本市調査回数に含めない)にわたる発掘調査が実施されている。そのうち、福岡城跡の調査として実施されたのは33次33地点、福屋館跡発掘調査事業として実施されたのは23次24地点である。表1にその内訳を示した。なお、表中の文献番号は6頁の参考文献一覧に対応する。

城内における調査のうち、櫓跡に関しては、祈念櫓(福岡城跡第6次)、月見櫓(同第16次)、時櫓(同第18次)、花見櫓(同第21次)、潮見櫓(同第25・38次)があり、礎石や、階段等の付属施設、基礎石垣等の遺構が確認され、将来の史跡整備を進める上で重要な成果を上げている。門跡については、下の橋・上の橋大手門の調査成果(同第48次)を基に平成17年度から下の橋大手門の復元整備が進められている。堀に関しては、内堀内壁の調査により土塁下部に腰巻石垣が存在していたことは確定的となり、その初現と土塁の構造復元も合わせて今後の検討課題である。肥前堀、中堀の調査は、市街地の調査のため面積が狭いという制約があるが、大正年間までに完全に埋め戻された同堀の規模や構造、位置の確定などを検討する上で徐々に成果が蓄積されている状況である。



図2 国史跡福岡城跡の位置(1/50000)

(1:福岡城跡 2:博多遺跡群 3:元寇防塁(西新～地行地区))



図3 議院議事堂敷地位置図(1/5000)
(※図中の数字は新築次第を示す)

表1. 国史跡福岡城跡調査一覧

(平成19年3月31日現在)

次	地区	調査原因	面積	調査期間	地区別回数	文献	備考
A	平和台野球場南側	テニスコート新設		5108(3日間)	海鏡館跡1次	4,16	九州文化総合研究所
B	三ノ丸西北郭	国立病院建設		590626~590702		4	文部省文化審議委員会
1	6301 三ノ丸東郭	裁判所建設	596	631007~631105 640327~640331	海鏡館跡2次	2,3	福岡県教育委員会
2	7605 城北部内堀外壁	地下鉄建設	14,900	761201~771008		7,8,9	史跡城外
3	7728 薬院新川石垣	地下鉄建設	500	780301~780630		7	史跡城外
4	7948 三ノ丸舞臺屋敷跡	公園整備	2,200	790719~790811		5,11,12	史跡城内
5	8134 城东北部内堀外壁	ビル建設	70	820317~820326		7	史跡城外
6	8343 本丸折金橋跡	史跡整備	36	840201~840612			史跡城内
7	8447 肥前堀	公園建設	580	840601~840612	肥前堀1次		史跡城外(県教委)
8	8533 肥前堀	市庁舎建設	150	850700~850800	肥前堀2次	8	史跡城外
9	8747 三ノ丸	球場改築	650	871225~880120	海鏡館跡3次	16	史跡城内
10	8829 三ノ丸	確認調査	856	880727~881210	海鏡館跡4次	16	史跡城内
11	8865 城西~南内堀内壁	城壁浄化	500	880727~881210		14,15	史跡城内
12	8840 肥前堀	ビル建設	650	881107~881126	肥前堀4次	17,18,19,20	史跡城内
13	8910 三ノ丸	確認調査	1,200	890420~891207	海鏡館跡5次	16	史跡城内
14	8950 肥前堀	庁舎建設	700	891011~891021	肥前堀4次	21	史跡城外
15	9005 三ノ丸	確認調査	1,300	900409~910131	海鏡館跡6次	16,31	史跡城内
16	9065 本丸月見橋跡	確認調査	190	910301~910331		22	史跡城内
17	9130 三ノ丸	確認調査	1,000	910601~920331	海鏡館跡7次	24,31	史跡城内
18	9146 本丸時橋跡	確認調査	278	920301~920331		49	史跡城内
19	9218 三ノ丸	確認調査	1,670	920615~921030	海鏡館跡8次	25	史跡城内
20	9236 三ノ丸	確認調査	430	920910~930331	海鏡館跡9次	26,31	史跡城内
21	9262 三ノ丸花見橋跡	確認調査	200	930301~930331			史跡城内
22	9326 三ノ丸西北部郭	確認調査	456	930816~940228	海鏡館跡10次	28	史跡城内
23	9345 追廻門南東郭内堀内壁	公園整備	221	931213~940315		27	史跡城外
24	9353 本丸西門	環境整備	80	931211~931221		50	史跡城内
25	9363 三ノ丸月見橋跡石垣	史跡整備	65	940301~940328		49	史跡城内
26	9416 赤坂門	変電所建設	430	940525~940806		39	史跡城外
27	9420 三ノ丸	展示館建設	50	940606~940731	海鏡館跡11次	30	史跡城内
28	9432 三ノ丸	確認調査	850	940801~950315	海鏡館跡11次	30	史跡城内
29	9451 三ノ丸東郭	裁判所改築	1,024	941101~950228		34	史跡城内
30	9463 三ノ丸東郭南土塁	確認調査	60	950201~950228	海鏡館跡11次	30	史跡城内
31	9537 三ノ丸	確認調査	300	951101~960329	海鏡館跡12次	33	史跡城内
32	9546 中堀	社屋建設	154	951211~960329		32	史跡城内
33	9561 三ノ丸西北郭土塁	確認調査	500	960301~960329		50	史跡城内
34	9617 三ノ丸西南郭土塁	仮駐車場整備	32	960621~960702		50	史跡城内
35	9620 三ノ丸中央郭	確認調査	450	960704~961204	海鏡館跡13次	33	史跡城内
36	9630 肥前堀	共同住宅建築	46	960823~960823		36	史跡城外
37	9639 中堀北壁	社屋建設	10	960912~960912		37	史跡城外
39	9671 三ノ丸月見橋跡	確認調査	300	970220~970318		49	史跡城内
39	9736 三ノ丸中央郭	確認調査	204	970818~980131	海鏡館跡14次	35	史跡城内
40	9751 追廻門南側内堀内壁	確認調査	135	971027~971107		50	史跡城内
41	9807 平和台球場跡地	公園整備	230	980410~980416	海鏡館跡15次	38	史跡城内
42	9831 平和台球場跡地	確認調査	930	980922~990120	海鏡館跡16次	38	史跡城内
43	9910 平和台球場跡地	確認調査	3,500	990422~000315	海鏡館跡17次	39	史跡城内
44	0008 平和台球場跡地	確認調査	1,750	000425~010316	海鏡館跡18次	40	史跡城内
45	0060 城南内堀内壁	公園整備	110	010105~010131			史跡城内
46	0064 中堀北壁	社屋建設	160	010302~010330		50	史跡城外
47	0109 平和台球場跡地	確認調査	2,000	010521~020329	海鏡館跡19次	41	史跡城内
48	0129 下の橋・上の橋大手門	確認調査	378	011002~020329		42	史跡城内
49	0218 平和台球場跡地	確認調査	1,200	020513~030331	海鏡館跡20次	44	史跡城内
50	0309 平和台球場跡地	確認調査	2,425	030606~040331	海鏡館跡21次	44	史跡城内
51	0415 平和台球場跡地	確認調査	2,110	040401~050331	海鏡館跡22次	45	史跡城内
52	0502 平和台球場跡地	確認調査	2,110	050404~060331	海鏡館跡23次	47	史跡城内
53	0503 城南内堀内堀外壁	共同住宅建設	156	050404~050520		46	史跡城外
54	0514 肥前堀	社屋建設	288	050425~050426		48	史跡城外
55	0554 下の橋大手門石垣	石垣保存修理	74	051115~060320			史跡城内

※太字は本報告書で報告するもの。文献番号は6頁番号に同じ。

関連文献・報告書

- (1) 小田富士雄「福岡市福岡城跡採集遺物調査報告」1961
- (2) 福岡県教育委員会「史跡福岡城発掘調査概報」福岡県文化財調査報告書第31集 1964
- (3) 首藤次男「福岡高等裁判所地区の地質」福岡県文化財調査報告書第31集 1964
- (4) 高野弘鷹「平和台の考古史料」(一)1972
- (5) 福岡市教育委員会「筑前国福岡城三ノ丸 御鷹屋敷」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1980
- (6) 福岡市教育委員会「史跡福岡城跡環壕整備報告書」1981
- (7) 福岡市教育委員会「福岡城址一内堀外壁石積の調査一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983
- (8) 池崎謙二・森本朝子「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983
- (9) 九州大学考古学研究室「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983
- (10) 福岡市教育委員会「福岡城肥前堀一市庁舎建設に伴う埋蔵文化財の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集 1986
- (11) 福岡市教育委員会「筑前国福岡城三ノ丸 御鷹屋敷 図録編」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1990
- (12) 尾崎直人「御鷹屋敷跡から出土した茶陶関係の陶片について」福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1990
- (13) 福岡市教育委員会「福岡市の近世社寺建築」1990
- (14) 福岡市教育委員会「福岡城跡・IV 一内堀内壁の調査一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991
- (15) 三木隆行「福岡城関係資料年表」福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991
- (16) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅰ 発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 1991
- (17) 福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第3次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (18) 小林茂「絵図・地図からみた肥前堀」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (19) 下山正一「肥前堀周辺の表層および地下地質」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (20) 磯 望「肥前堀周辺の地形と調査地点の地形形成過程」福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
- (21) 福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第4次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集 1992
- (22) 福岡市教育委員会「福岡城 月見橋」福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集 1992
- (23) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅱ 発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集 1992年
- (24) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集 1993年
- (25) 福岡市教育委員会「福岡城の橋」1994
- (26) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅳ 平成4年度発掘調査概要報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第372集 1994
- (27) 福岡市教育委員会「福岡城跡第23次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集 1995
- (28) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡5 平成5年度発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第416集 1995
- (29) 福岡市教育委員会「福岡城赤坂門跡 福岡城跡第26次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第463集 1996
- (30) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡6 平成6年度発掘調査概要報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第486集 1996
- (31) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡7 一鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第487集 1996
- (32) 福岡市教育委員会「福岡城跡 福岡城中堀跡の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第498集 1997
- (33) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡8 平成7・8年度調査概要報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第546集 1997
- (34) 福岡市教育委員会「史跡福岡城跡 一東の丸の発掘調査一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第546集 1997
- (35) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡9 平成9年度発掘調査概要報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第586集 1998
- (36) 福岡市教育委員会「福岡城跡36次」福岡市埋蔵文化財年報VOL.11 2007
- (37) 福岡市教育委員会「福岡城跡第37次調査」福岡市埋蔵文化財年報VOL.11 2007
- (38) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡10 平成10年度発掘調査概要報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第620集 1999
- (39) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡11 平成11年度発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第695集 2001
- (40) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡12 福岡市埋蔵文化財調査報告書第733集 2002
- (41) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡13 平成13年度発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第746集 2003
- (42) 福岡市教育委員会「福岡城跡大手門 第48次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第772集 2003
- (43) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡14」福岡市埋蔵文化財調査報告書第783集 2004
- (44) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡15 一平成14年度発掘調査報告書一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第838集 2005
- (45) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡16 平成15年度発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第875集 2006
- (46) 福岡市教育委員会「福岡城跡 一第53次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第960集 2007
- (47) 福岡市教育委員会「鴻臚館跡17 平成16・17年度発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第968集 2007
- (48) 福岡市教育委員会「福岡城跡第53次調査」福岡市埋蔵文化財年報VOL.20 2007
- (49) 福岡市教育委員会「福岡城跡 一雁見橋・時椿臺跡に伴う確認調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第969集 2007
- (50) 福岡市教育委員会「福岡城跡15 一城内整備に伴う確認調査および中堀の緊急調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1005集 2008

第II章 史跡指定地内の確認調査

1. 第24次調査(本丸跡)

(1)調査地点の位置(図4・5)

福岡城本丸は、内堀に区画された城郭のほぼ中央から南側に位置している。この一帯は、赤坂山から北へ延びた尾根筋の鞍部にあたる。南北に約220m、東西に約120mの矩形(南側は張り出しがある)をなす本丸(約25000m²)には、南～南西部に天守台と小天守、武器櫓、北西部に時櫓、北東部に祈念櫓、東南部には月見櫓を配し、出入口は北に表御門、西側に裏御門が置かれた。表御門、祈念櫓(県指定有形文化財)が現存している。なお、本丸における発掘調査は、祈念櫓跡(第6次)、月見櫓跡(第16次)、時櫓跡(第18次)が行われている。

本調査地点は、時櫓跡から南側に約30m、裏御門跡から北に約38mの地点である。西側には裏御門櫓から時櫓へ続く櫓、または漆喰塀の基礎石垣が接している。調査地点の現地表標高は22.8m前後で、二の丸との比高差は4～4.3mほど高い。

(2)調査概要

調査は、トイレの改築と上下水道の埋設に伴う掘削予定範囲(約80m)を調査対象区として設定した(図5)。

改築計画案に示された掘削予定深度によると地下遺構に何らかの影響が予想されたために、調査は遺構・遺物の遺存状況と深度、およびそれらの内容確認を目的として実施した。調査にあたっては、主に表土直下および近現代の掘削による擾乱部分について精査するとともに周辺地形測量も行った。

(3)遺構と遺物(図7～15)

1)遺構

遺構は、明治期以降の所産と考えられる石垣前面の石組側溝、建物地業跡(布掘基礎)、江戸期と思われる柱穴である。調査区における土層堆積は、表土、擾乱土層、整地層、盛土層に分かれる。下記に述べるSB01・02等



図4 本丸跡遺豊(南東から)



図5 調査区位置図(1/2500)



図6 調査作業風景(北から)

の遺構は明治期以降と思われる整地層内に、柱穴はその下層から基盤面と思われる第16層(白色～黄白色風化頁岩を含む灰褐色粘質土)に掘りこんでいる。

SD01 (石組側溝)

裏御門櫓から時櫓へ続く石垣下縁にほぼ接して設けられた石組側溝である。表土から-30～35cmの面で、南北10.7mについて確認した。南北方向に調査区外にさらに続いている。小口幅15～30cmほどの玄武岩や花崗岩を一段または二段ずつ小口面をそろえて並べ置いている。西側壁は比較的良好に残っているが、東側面の石組みは、調査区南側端で1石のみ確認した。SB01によって壊されている。走向は、座標北から西へ5°振れている。溝幅は推定約40cm、深さ30cmである。城内の雨水等の排水処理の側溝と考えられる。瓦破片が西側石垣との間の裏込め土内に二次堆積の状況で出土している。明治期以降のものと思われる。

SB01(建物地業(布基礎)跡)

幅50～55cm、深さ30～40cmの溝を長方形に掘削(布掘り)後、玄武岩を主とし、砂岩、礫岩等の準大の礫石や扁平な砕石(栗石)を厚さ10cm程度で敷き詰めている。布掘りに際して側溝の東側壁を壊している。礎石と思われるやや大ぶりの石の上面は栗石の同一面からやや上面に高さを合わせている。建物の規模は、礎石が一部抜かれており、北辺が未確認であるが、布掘りの芯々間で、東西幅(梁行)3.6m(2間)、南北長(桁行)9m(5間)以上と推定する。布掘りの区画内には、東柱の礎石が南側に残っており、床が一部に設けられた施設だったことが考えられる。長軸方向は先述の側溝の走向よりやや西に振れている。



図7 調査区全景(東から)

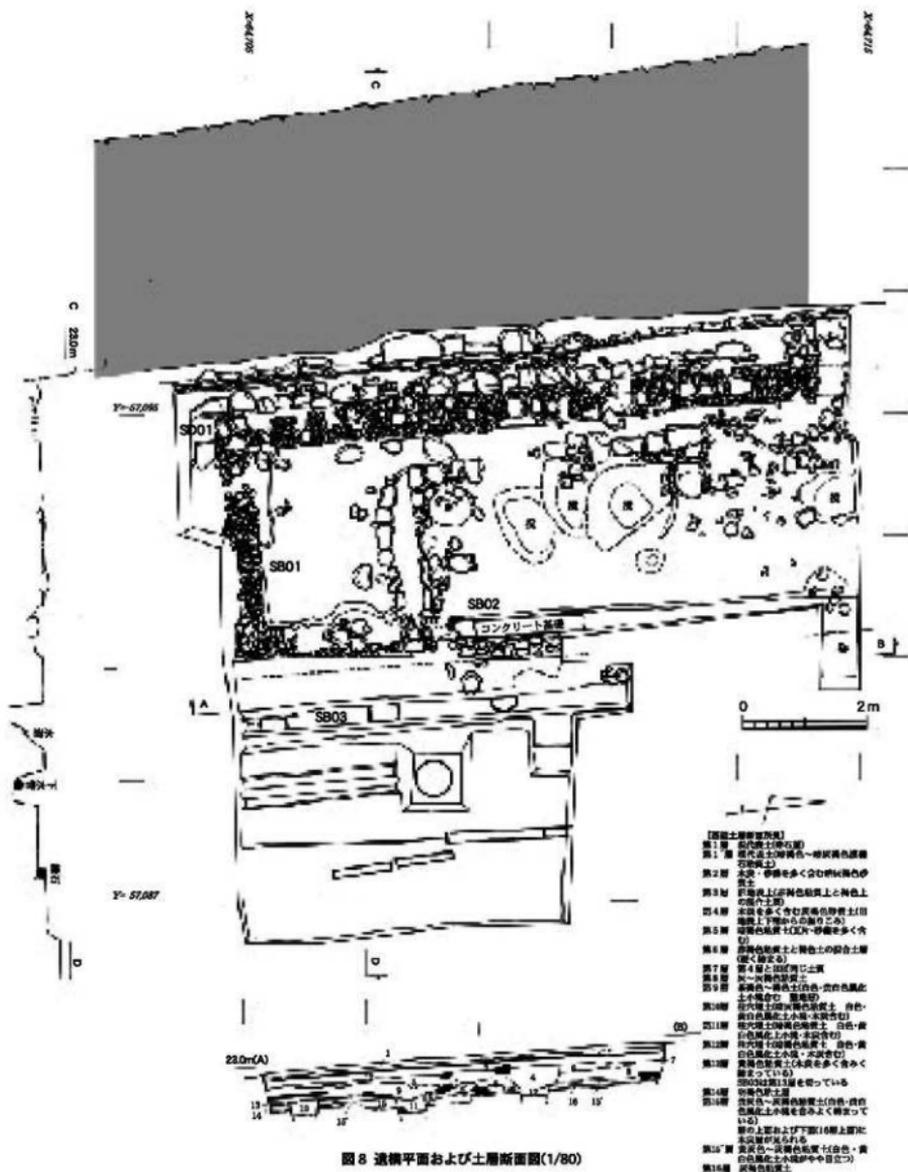


図8 透視平面および土層断面図(1/80)



図9 石垣前面側溝および布基礎跡(南から)



図10 石垣前面側溝および布基礎跡(北から)



図11 建物跡全景(北から)



図13 建物基礎(部分 西から)



図12 孤立柱建物柱穴(北から)

SB02(建物基礎跡)

SB01と重複している。平面位置を北側へずらし、玄武岩等の地覆石(東辺ではコンクリート製の地覆となっている)を据え直し規模を縮小している。長軸方向は座標北から西へ $8^{\circ}40'$ 西へ振れている。建物の規模は東西幅(梁行)2.6m以上、南北長(桁行)6.3mと推定する。コンクリート製の地覆は基礎の修復に際し、

部分的に新たに用いられたものかもしれない。SB01とSB02は明治期～昭和前期のものと思われる。

SB03(礎石据付穴または掘立柱建物柱穴)

現在の水道敷設溝の床面に柱穴を確認した。西側の石垣下縁から東へ約5.4m離れた位置に石垣走向とはほぼ平行して3基が並んでいる。柱穴の平面形は不整な隅丸方形～円形で径または一辺が45～50cmで比較的大きい。掘立柱建物または礎石据え付け穴と思われる。柱穴芯々間で柱間約1.8～1.9mで南北に並んでいる。柱間2間分以上の建物の可能性がある。土層堆積のあり方からみると、SB01の下部の整地土層下部からの掘り込みであることから明治期以前のものと思われる。

2)出土遺物(図14・15)

遺物は、表土、整地層上面、攪乱土層から出土した。調査の性格上、確認した遺物のうち、表土および整地層上面、攪乱土層以外の瓦については取り上げず、原位置のまま埋め戻している。近世の瓦破片が主であるが、取り上げたもので主要なものは、中国産白磁2、近世の肥前系染付2、陶器1、土師黄土器1である。瓦には、平瓦、軒平瓦、丸瓦、軒丸瓦、鬼瓦、道具瓦がある。

1・2は中国産白磁碗の破片である。口径はいずれも15.6～15.8cm。北宋期のものと思われる。焼成良好で釉薬は透明である。2は白濁した不透明釉で、表面は細かな氷裂が走る。口縁端部には幅5mmの小さな玉縁を削り出している。胎土は白色。3・4は肥前系染付。3は碗の底部破片である。高

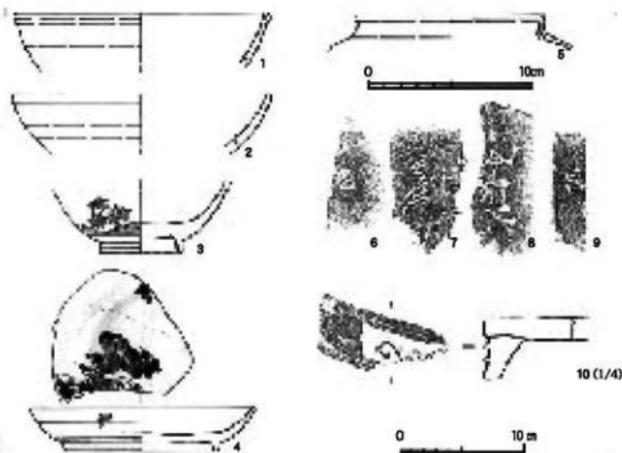


図14 出土遺物実測図(1/3・1/4)

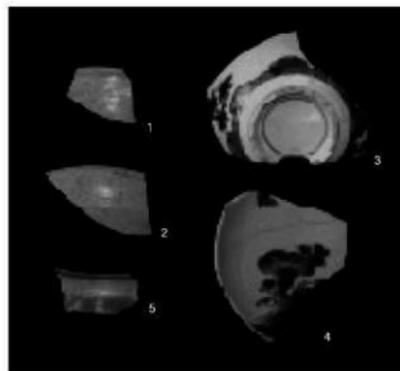


図15 出土遺物(1/3)

台径5.0cm。外面には竹葉文・雲文をあしらう。4は小ぶりの皿で、口径11.8cm、器高2.6cm、高台径9.0cm。内面には牡丹文を大きく描いている。呉須の発色はあまり良くなくすんだ濃紺色である。3・4いずれも畳付には細かな砂粒が溶着している。5は施釉陶器壺口縁部である。口径12.4cm。胎土は泥質できめ細かく良く焼き締まっている。6～9は近世の瓦に押印された銘である。6は菱文で平瓦凹面中央部に押印。7は「□(惣)右衛門」。8は「今宿又一」。9は「昌」と判読できる。いずれも丸瓦の背面中央に押印されたものである。10は軒平瓦の瓦当部破片である。瓦当内区高は2.8cmで、推定幅は約12～14cm。器面は丁寧なナデ調整で、黒灰色に燻されている。唐草文は彫りが深く明瞭である。

(4)小 結

今回の調査は、改築予定建物の建築範囲における遺構・遺物の遺存状況と現地表からの深度、および内容確認を目的として実施した。調査の性格上、遺構深度と平面確認が主となったが、その結果、当該地点においては、近代以前と思われる掘立柱建物または礎石建物、明治期以降の所産と考えられる石垣前面の石組側溝、建物地業跡(布掘基礎)が確認できた。建物地業跡については、当初の自然石の礎石建ち建物の後、一部コンクリート製基礎を用いた建物に改築されている。したがって、当該地点では、建物が少なくとも3回の建て替えがあったと考えられる。

建物地業跡がのる整地層下部で確認された建物SB03については、江戸後期に描かれた「福岡城本丸の図」(写し) 参考によると、本丸御殿西側の時構跡と裏御門跡との中間地点に位置して、柱間が1間×2間ともとれる簡易な建物が描かれている。裏御門警備のための詰所的な建物かもしれない。完掘していないために即断は控えねばならないが、位置および規模からみて当該建物が該当する可能性が高いと思われる。なお、建物地業跡については、旧陸軍24連帯付属属衛戍病院関連の施設が考えられる。

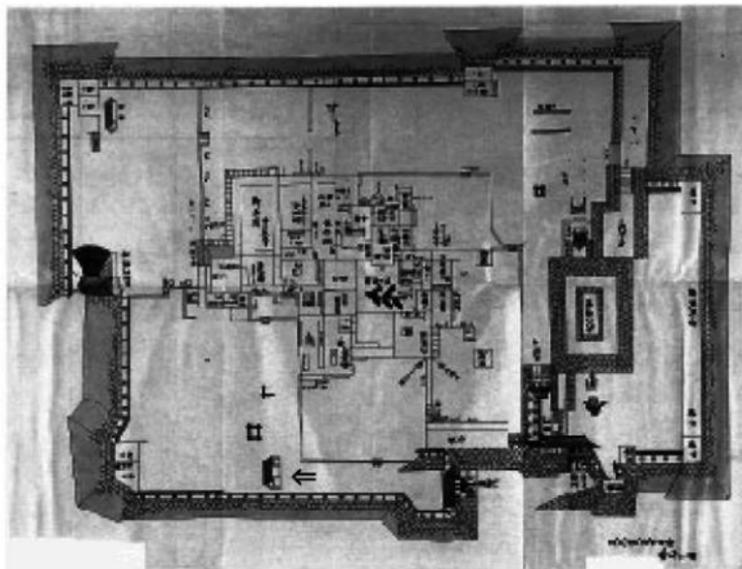


図16 福岡城本丸の図

2. 第33次調査

(1) 調査地点の位置(図17~19)

福岡城三の丸は北面土塁の東西端部間で約1000m、南北奥行きが600~660mを測る広大な領域を有しており、主要四隅には、西北隅に潮見櫓、南西隅に花見櫓、北東隅および南東隅には名称は不詳であるが、櫓をそれぞれ配しその間には長大な土塁を築いていた。

三の丸北西郭とは、現在の城内道路西側(下の橋御門)から黒田如水の隠居地である御産屋敷を含んだ西側、舞鶴中学校北縁から北側の範囲を便宜的によんでいる。

本調査地点は、西側に潮見櫓跡が位置し、下の橋御門から西に約210~140mの地点である。北側には東西に延びる幅約50~60mの内堀(5号濠)が接している。調査地点の現地表標高は6.5~8m前後である。

(2) 調査概要

旧福岡国立中央病院跡地整備の一環として園路整備による土塁掘削への影響が考えられたため、土塁本来の平面および断面形状の確認を目的として調査を行った。調査トレンチはゴミ穴等すでに掘削されている箇所を選び、4カ所に設け、あわせて土塁の現状地形測量を行った。なおトレンチは西から順に第1~4トレンチと呼称した。

(3) 各トレンチの土層堆積状況(図28)

土層所見はいずれも各トレンチ東壁での観察である。

第1トレンチ 南北長7.50m、東西幅1.20mの規模で設定。地表から0.65m、最深部で約1.2m掘り下げた。東壁中央部が土塁の頂部に位置し、標高7.1mほどを測る。トレンチ南側には攪乱土坑があり掘部を破壊している。土層は3層に分かれ、トレンチ最下層の掘り挙げから人頭大の風化頁岩を多く含む黄灰色砂質土層が土塁盛土の上層部にあたる。

第2トレンチ 南北長5.2m、東西幅2.6mの規模で設定。最深部で地表から1.8~2.0m掘り下げた。土層は大きく3層に分かれる。中央には攪乱土坑がある。ほぼ表土直下(-20cm)で土塁盛土となる。黄白色風化頁岩の細片を上層部では多く含む。下部にゆくにつれて大ぶりの風化頁岩が主となる。



図17 三の丸北西郭北面土塁遺蹟(南東から)



図18 調査トレンチ(1~4)配置図(1/4000)



図19 潮見櫓跡と北面土塁(北西から)平成5年当時

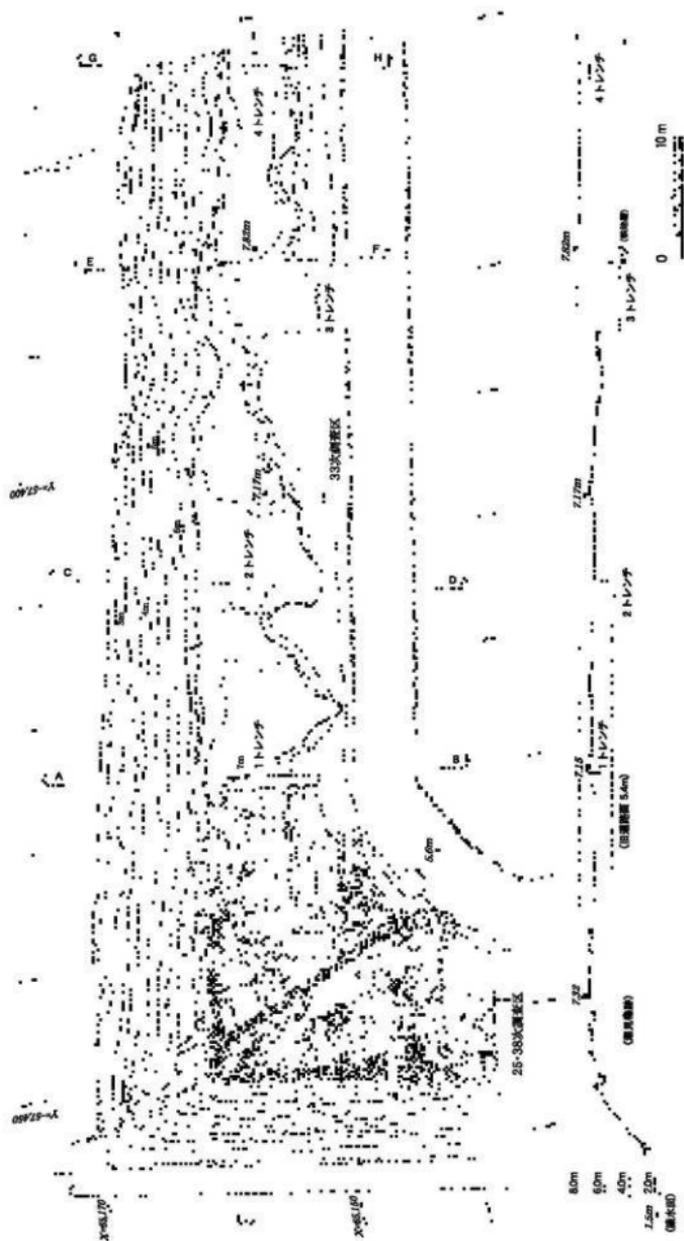


図20 第1～4トレンチ配置、跡体土層平面および発掘面図(1/400)



図21 第1トレンチ(南から)

土塁頂部から南法面はかなり削平され平坦な面となっており、頂部標高は6.7~6.8mを測る。

第3トレンチ 南北長8.8m、東西幅5.8mの規模で設定。最深部で地表から3.4m掘り下げた。トレンチの中央部から両側にはゴミ焼却のための大きな擾乱坑があった。土層は大きく4層に分かれる。第3トレンチと同様表ほぼ表土直下(-20cm)で土塁盛土となる。この風化頁岩を主とする盛土下層に、黄



図22 第2トレンチ東壁(西から)



図23 第3トレンチ東壁(西から)



図24 第4トレンチから土塁西側をみる(東から)

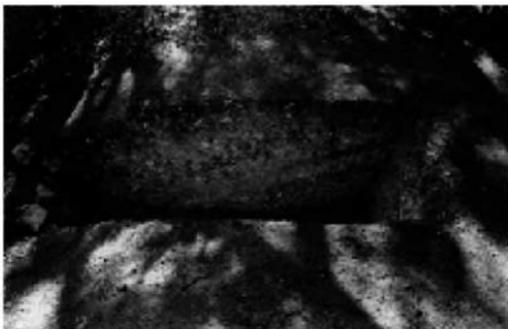


図25 第4トレンチ西壁(東から)

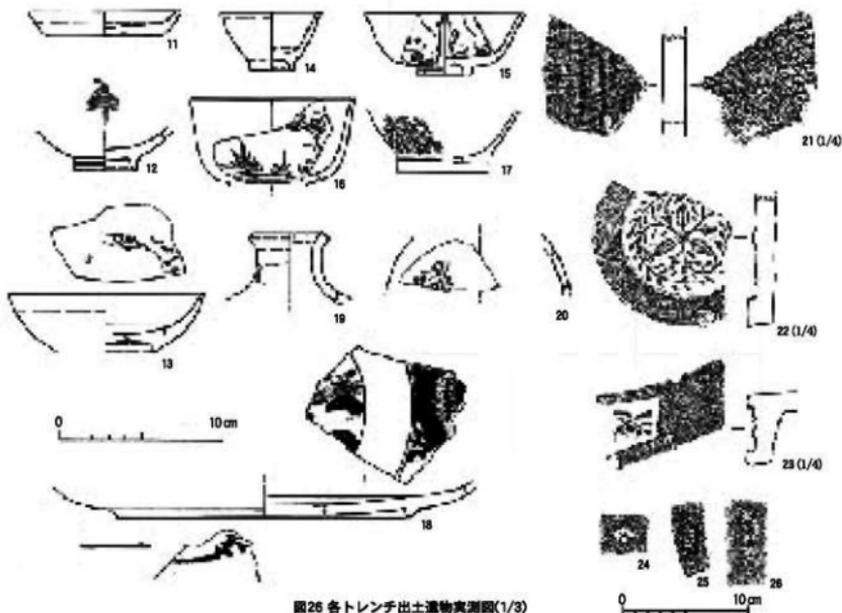


図26 各トレンチ出土遺物実測図(1/3)

白～明褐色の風化土(真砂土か)がみられた。この層は南に隣接する第22・28次調査時に標高4.6～4.8mの面で確認された整地層と同一のもので、三の丸西北郭の造成工事の過程を知る上で鍵層となる。調査所見では層厚1m以上である。

第4トレンチ 最東端のトレンチである。南北長5.5m、東西幅1.6mの規模で設定。最深部で地表から1.5m。南側

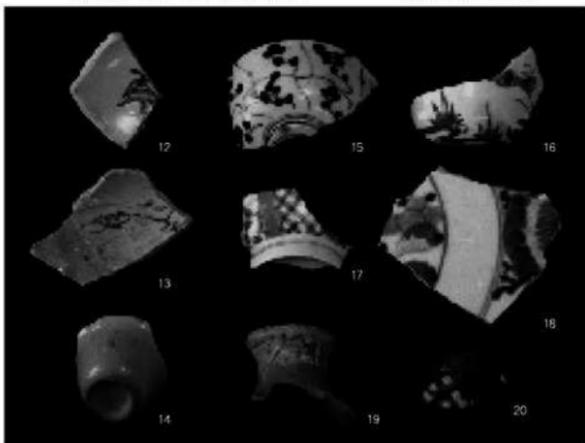


図27 各トレンチ出土遺物(1/3)

に攪乱土坑がある。この地点でも表土直下(-20～35cm)で土塁盛土(明褐色白色頁岩風化土)となる。この地点での土塁頂部は標高7.9～8.0mである。第1トレンチとの比高差は0.8～1.0mあり、潮見櫓の床構造と、東側基壇石垣と土塁との接合のあり方を検討する上で注意すべき点である。

(3)出土遺物(図26・27)

遺物は、少量の古代の瓦、白磁、近世の肥前系陶磁器(染付碗・皿、播鉢、等)、高取系陶器、土師皿、瓦質火鉢、近代の土師質七輪、鉄製筋交等が出土。これらはいずれも各トレンチの表土および攪乱土坑から二次堆積の状態で出土している。おおむね江戸時代後期、幕末～近代のものが多い。

11は土師器皿。口径・器高・底径は9.1・1.6・7.4cm。底部は回転糸切り。12～18は肥前系陶磁器。12・15～18は染付で、内底見込みになんらかの昆虫をデフォルメした碗12、外面に菊花と草流水を組み合わせた碗16、唐草をあしらった器高がやや低い碗15、七宝文を区面に配し、高台と体部が直線的な17、内面に牡丹等を描いた皿18等がある。呉須の発色はいずれもあまり良くなく、15は濃紺色で、他はくすんだ紺色。14は無地の猪口。口径・器高6.1・3.5cm。透明釉が薄くかかる。13は唐津系の皿で、砂目痕が残る内面には鉄釉による松文を描いている。口径約14cm。19・20は陶器小壺の口縁部と肩部。19は口縁部から頸部にかけて薄く黄色味がかった灰白色釉をかけ、二次焼成している。胎土は赤褐色で泥質である。口径3.9cm。20は黒褐色の鉄釉を施した後、白濁釉を肉厚に丸く盛り花文とする。肩の張りは弱い。21は表面に布目圧痕、裏面に格子目印き痕が残る古代の平瓦片。22は藤巴文を瓦当文様とする軒丸瓦。瓦当の復元径は15cmほど。23は藤文をあしらう軒平瓦。24～26は近世瓦に押印された銘。24は菱文、25・26はいずれも「今宿三右衛門」と読める。

(4)小 結

今回の調査では、第3トレンチ西側から第1トレンチ周辺は土塁頂部および南側法面は大きく改変を受けていることがわかった。また第3トレンチ東壁～4トレンチにかけては比較的良好に土塁形状をとどめられていると思われ。測量調査では、調査区域内においては土塁北側法面の遺存状況は比較的良好であると推定できた。

土塁頂部の削平の程度と土塁南側法面と樹部の状況については確認することができなかったが、本来の形状復元にあたっては周辺の今後の調査結果に期待したい。

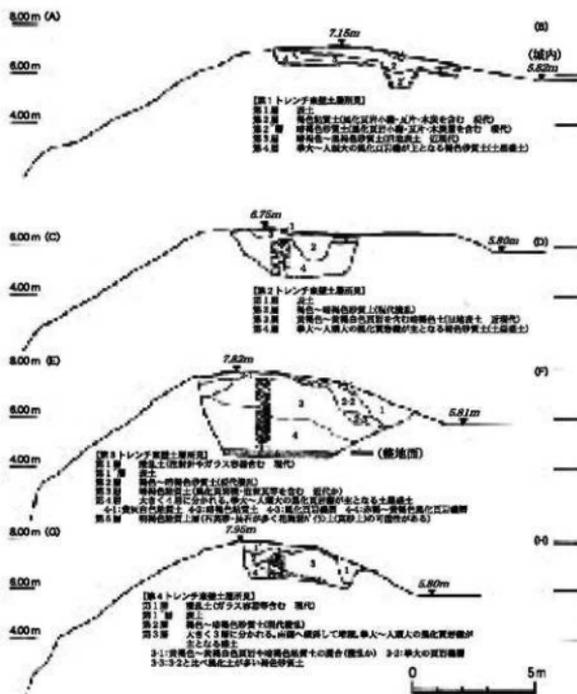


図28 第1～4トレンチ土層断面および現状土塁断面(1/200)

3. 第34次調査

(1) 調査地点の位置(図29・30)

現在の舞鶴中学校北縁より南側の範囲を三の丸南西郭と、便宜上呼ぶ。東側は、二の丸の西縁に配される松木坂御門から桐木坂御門を結び、追廻門に至る石垣下端の範囲である。いわゆる堀め手およびその周辺にあたる。周辺の城郭施設には追廻橋、追廻御門、花見櫓があり、二代目忠之の頃には藩主居屋敷が東側に、西側には侍屋敷が配されていた。調査地点は郭南西隅から数えて1番目と2番目の「屏風折」間の土塁東斜面に位置する。調査地点の土塁頂部は8m前後である。



図29 三の丸南西郭土塁遺景(南東から)

(2) 調査概要

仮駐車場の整備計画案では、土留めを兼ねたブロック壁の基礎工事によって、現状土塁裾部に影響が及ぶことが予想されたために、土塁本来の平面および断面形状の確認を目的として調査を行った。調査トレンチはゴミ捨て場としてすでに掘削されている箇所を選び、土塁主軸に直交して2カ所に設け、併せて土塁の現状地形測量を行った。なお、トレンチは北から順に第1・2トレンチと呼称した。トレンチ間の距離は約30mである。



図30 三の丸南西郭調査トレンチ配置図(1/2500)

(3) 遺構と遺物(図31~40)

遺構は、各トレンチで南北に延びる近代以降の土塁縁石と石組みの側溝を確認した。

各遺構の走向は座標軸北から西偏 $22^{\circ}20'$ で、大濠側土塁下縁の現代側溝の走向とほぼ同一方向である。

第1トレンチ 土塁の主軸方向にほぼ直交して東西長6.3m、南北幅1.4~1.9mの規模で設定し、最深部で地表から0.7~0.8m掘り下げた。南壁での土層は20層に分かれる。第12層は土塁盛土層で、下記に述べる土塁縁石が下縁を納めている。

遺構は、トレンチ東側で北北西に延びる石組みの側溝、西側では側溝とほぼ同じ走向の土塁縁石を確認した。

第2トレンチ 東西長7.1m、南北幅1.9~2.3mの規模で設定し、最深部で地表から0.7~0.8m掘り下げた。南壁での土層は21層に分かれる。第1トレンチと同様に南北に延びる石組みの側溝、土塁縁石を確認した。

縁石 第1トレンチでは長さ1.4mについて、第2トレンチでは長さ1.8mについて確認。小口幅15~50cmの扁平な自然礫を一段だけ据え置いているだけの簡単な造作である。第1トレンチ南壁では、縁石上面で一旦平坦化されていることから(第10・13層)、何段かの石積がなされていた可能性もある。

石組側溝 第1トレンチで長さ15mについて、第2トレンチでは長さ18mについて確認した。小口幅が25~70cmの扁平な自然礫を一段または二段ずつ積んで側壁としている。側壁内法は60cm、深さは45~60cm。床面には石組みはない。床面標高は第1トレンチで4.1m、第2トレンチで4.25mで、勾配率1/200で南から北へ向かって低くなっている。

遺物は、土師器、肥前系陶磁器、土師質火鉢、近世~近代の瓦、石臼片等が表土や側溝内埋土から出土している。いずれも二次堆積である。

27~29は土師器皿である。口径・器高は27が6.0・1.2cm、28が7.9・1.5cm、29が8.1・1.6cmを測る。いずれも回転糸切り底である。30~32・35は肥前系染付碗である。口径8~10.5cm。30の外面には網目文、31は牡丹唐草文、外底には「壽」銘が、32の外面にはコンニャク判がみられる。35は染付輪花皿で、口径13.9cm。内面区画帯には網目と連弧文、外面裏文様に唐草文を施文。33は陶器で仏飯器。裾軸を前面に薄く施軸している。底部は回転糸切り。口径4.3cm。34は唐津系陶器皿。口径12.5cm。透明軸を全体に施軸している。36は陶器製



図31 第1・2調査トレンチ配置および土層現況測量図(1/500)

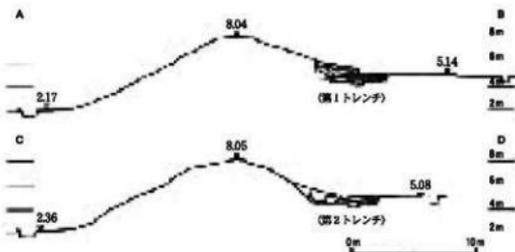


図32 三の丸南西界土層断面図(1/400)



図33 第2トレンチ掘削状況(北から)



図35 石組側溝(東から)



図36 第2トレンチ掘削状況(北から)



図38 石組側溝(東から)

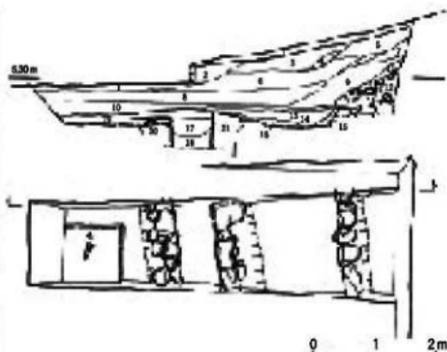


図34 第1トレンチ平面および土層断面図(1/80)

- 【第1トレンチ発掘土層断面】
- 第1層 第1層 埴(土)層(掘削し直したものの暗褐色～灰褐色粘り土)
 - 第2層 暗褐色粘り土(大畷を含む)
 - 第3層 暗褐色粘り土(7層とほぼ同層) 黒化灰質小礫を含む 田舎土
 - 第4層 褐色～暗褐色粘り土(黒化灰質小礫を含む)
 - 第5層 暗褐色粘り土(大畷を含む) 第9・11・12層の下に接する
 - 第6層 暗褐色粘り土
 - 第7層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土(二次堆積の可能性がある)
 - 第8層 灰褐色～暗褐色粘り土の二次堆積土(第9・11・12層の下に接する)
 - 第9層 暗褐色粘り土
 - 第10層 暗褐色粘り土
 - 第11層 暗褐色粘り土
 - 第12層 暗褐色粘り土
 - 第13層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第14層 暗褐色粘り土
 - 第15層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第16層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第17・18層 側溝内壁上層(暗褐色～灰褐色粘り土) 畷田跡(側溝跡やトレンチ痕を含む)
 - 第19層 暗褐色粘り土(深く掘る)
 - 第20層 暗褐色粘り土
 - 第21層 暗褐色粘り土
 - 第22層 暗褐色粘り土
 - 第23層 暗褐色粘り土

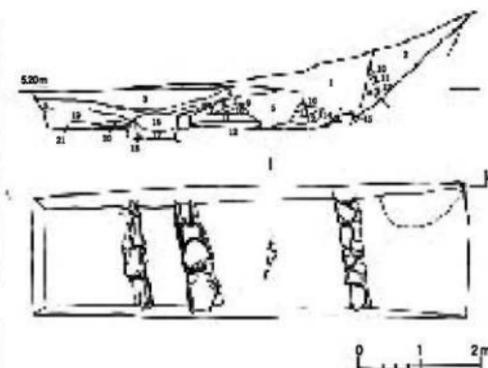


図37 第2トレンチ平面および土層断面図(1/80)

- 【第2トレンチ発掘土層断面】
- 第1層 第1層 埴(土)層(掘削し直したものの暗褐色粘り土)
 - 第2層 現代土(堆積物)
 - 第3層 現代土(堆積物)
 - 第4層 第2層 埴(土)層(掘削し直したものの暗褐色粘り土)
 - 第5層 暗褐色粘り土(大畷を含む)
 - 第6層 暗褐色粘り土
 - 第7層 暗褐色粘り土
 - 第8層 暗褐色粘り土
 - 第9層 暗褐色粘り土
 - 第10層 暗褐色粘り土
 - 第11層 暗褐色粘り土
 - 第12層 暗褐色粘り土(大畷を含む)
 - 第13層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第14層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第15層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第16層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第17層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第18層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第19層 暗褐色粘り土と小礫粘り土との混合土
 - 第20層 暗褐色粘り土
 - 第21層 暗褐色粘り土
 - 第22層 暗褐色粘り土
 - 第23層 暗褐色粘り土

の火入(口径19cm)で薄く褐釉を内外面に施釉。37は土師質の火鉢(口径28.2cm)。38は大ぶりの近世平瓦で凹面中央に菊花文を押印。39は三巴文軒丸瓦。瓦当直径は約15cm。焼成やや不良。

(5) 小結

当該地点での土塁は、断面形状等からみて比較良好に遺存していると思われる。頂部の高さは、8.0mほどで、三の丸北西部北面土塁の良く残っている箇所が7.9~8.15mでほぼ同じであることは注意される。ただし、第1トレンチで確認されたように、城内側土塁法面と裾部は一部改変を受けていると思われ、頂部がやや手狭な感が否めない。土塁本来の機能から考えると「犬走り」や「武者走り」といったものが福岡城の土塁にあったかどうかも含めて、現状土塁の形状については今後の検討すべき課題と思われる。

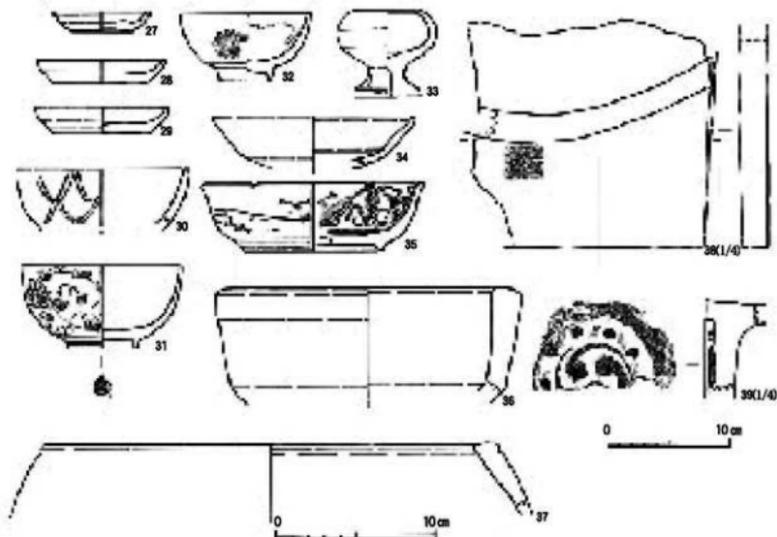


図39 各トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)

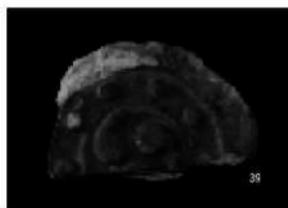
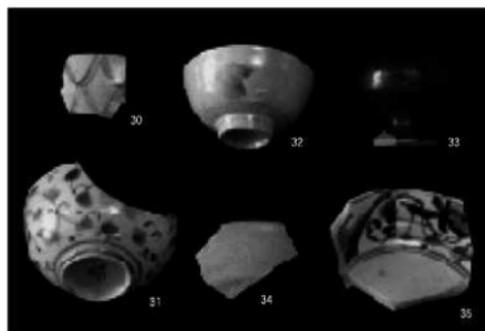


図40 各トレンチ出土遺物(1/3)

4. 第40次調査

(1) 調査地点の位置(図41・42)

三の丸南西郭の最南端部は、搦め手の守りとして花見櫓、鉄砲櫓を配し、追廻橋、追廻御門が設けられていた。

調査地点は、鉄物櫓台の南面石垣裾部に隣接した位置にあたり、大濠へ通じる内堀の出隅部分にあたる。この地点は、内堀から二の丸を画している高石垣裾へすり寄せたような地形をなしており、やや強い傾斜面である。現状は園路が整備されているために歩きやすくなっているが、本来はとりつきにくい急斜面であったと思われる、南丸南東隅に立つ南三階櫓台石垣から延びる南面土塁の法面へ連続していたと思われる。

(2) 調査概要

本来大濠へ通じていた内堀は、現在「6号濠」として池状に取り残されている。堀の腰岸整備とともに園路整備を行う計画案が示されたが、絵図や第23次調査成果から判断し、腰岸工事によって本来の堀の平面形や、腰巻石垣の保存に影響が及ぶと判断されたために、石垣の遺存状況と平面形の確認を目的として、トレンチによる確認調査を行うこととした。トレンチは等高線に直交させ、堀の汀線沿いに約10m離れて2カ所設定した。トレンチは北から第1・2トレンチと呼称し、石垣の確認と土層堆積の状況、周辺地形測量を行った。

(3) 遺構と遺物(図43～51)

第1トレンチ トレンチは南北長4.6m、東西最大幅2.2mの規模で設定。最深部で地表から1.3m掘り下げた。現況水面(標高2.4m)下-0.9mの面で腰巻石垣の上端を確認した。土層は大きく4層に分かれる。第1層は表土層で岸から堀内に堆積。第2層は石垣上端から堀内に堆積、第3層は石垣裏込め土、第4層は黄白～黄灰白色の第三紀風化頁岩(基盤層)である。土層の堆積状況は第2トレンチと基本的には同じである。

第2トレンチ トレンチは東西長3.8m、南北



図41 三の丸南西郭追廻御門周辺遠景(南東から)

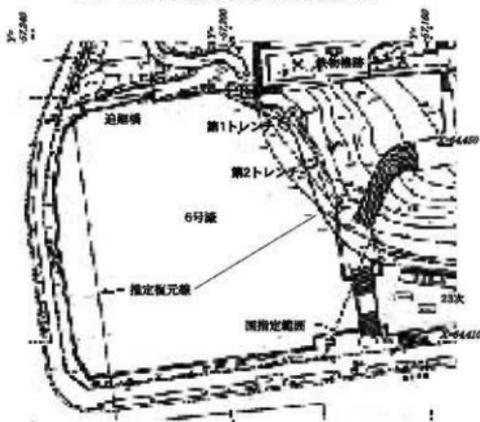


図42 三の丸南西郭トレンチ配置図(1/1000)



図43 トレンチ配置状況(北西から)

最大幅1.8mの規模で設定。最深部で地表から1.2m掘り下げた。北壁での土層は大きく4層に分かれ、第1トレンチと同様な堆積状況である。

石垣 標高1.5～1.6mほどの面で石垣上端を検出した。調査では上から3段目まで確認した。隣接する第23次調査では、石垣上端が標高約2.5mの面で、基底面から高さ約1.8mほどが確認されているが、本調査区の方が約1mほど低い。石垣上部が崩落した可能性も考えられる。石垣は人頭大～一抱えほどの砂岩や礫岩を主として、一部玄武岩も用いられている。第2トレンチでの石垣平面は直線的であるが、第1トレンチでは屈曲している。基盤層である第4層は、第1トレンチでは石垣上端から約2.5m岸側へ引いた位置から伏角約40°で、また第2トレンチでは、石垣上端から同じく約0.8mの位置から伏角約75～80°で堀込め部分の掘削を行ったものと思われる。裏込め土は風化頁岩角礫を多く含む黄白色～灰白色粘質土が主で、堅く締まっている。

遺物 堀内の埋土や裏込め上層から、近世～近代の瓦を主として、古代瓦、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦質土器等が出土している。いずれも

二次的に混入したものであり、石垣築造の年代観を物語るものではない。

40は土師器皿。口径・器高は6.7・1.1cm。41は唐津系陶器皿で、薄く緑色がかった褐釉を全面施釉後、内底見込みは輪状に掻き取っている。42・

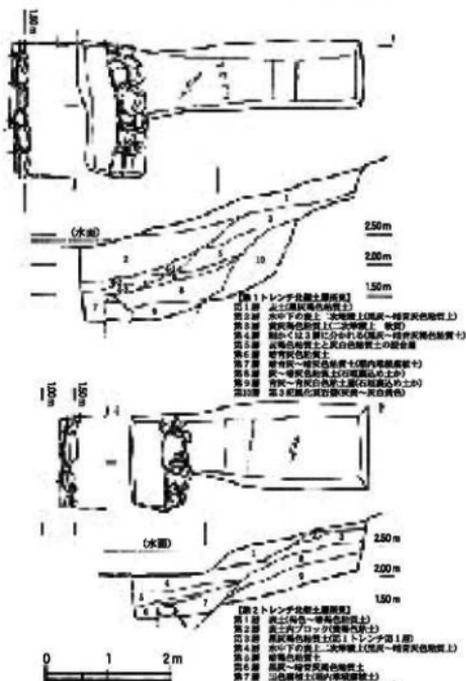


図44 第1・2トレンチ平面および土層断面図(1/80)



図45 第1トレンチ掘削状況(南西から)



図46 第2トレンチ掘削状況(南西から)

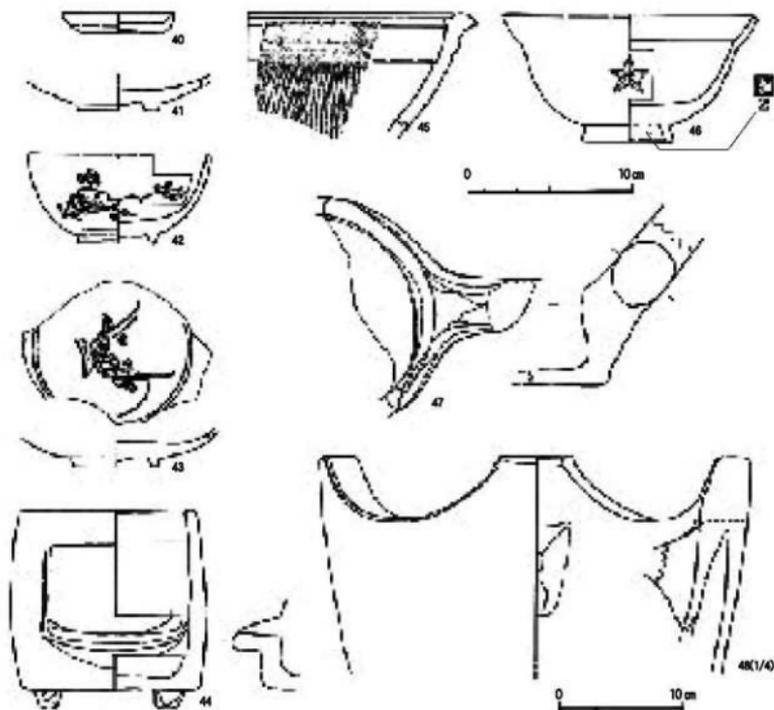


図47 各トレンチ出土遺物実測図1(1/3・1/4)

43は肥前系染付碗と皿である。いずれも折枝梅文を施文している。42の口径は10.8cm、器高5.4cm。内底見込みは施釉後輪状に掻き取り、砂目痕が残る。45は陶器製播鉢。復元口径は約27cm。赤褐色の釉薬を全面に施釉。九条単位で下ろし目をつけている。44・47は素焼きの三足付風炉と焙烙である。44の復元径・器高は12・10.6cm。火口は長方形の透かし。火受けが約1.7cm張り出している。表面はヘラまたはコテナデ仕上げ。45の復元径は約

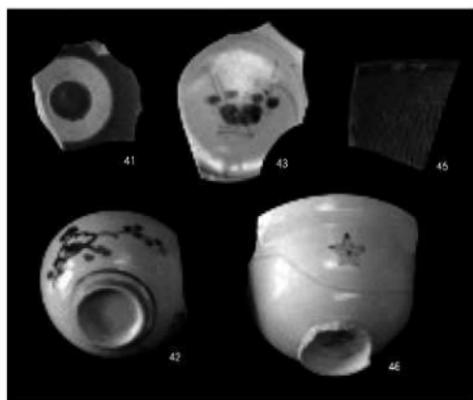


図48 各トレンチ出土遺物1(1/3)

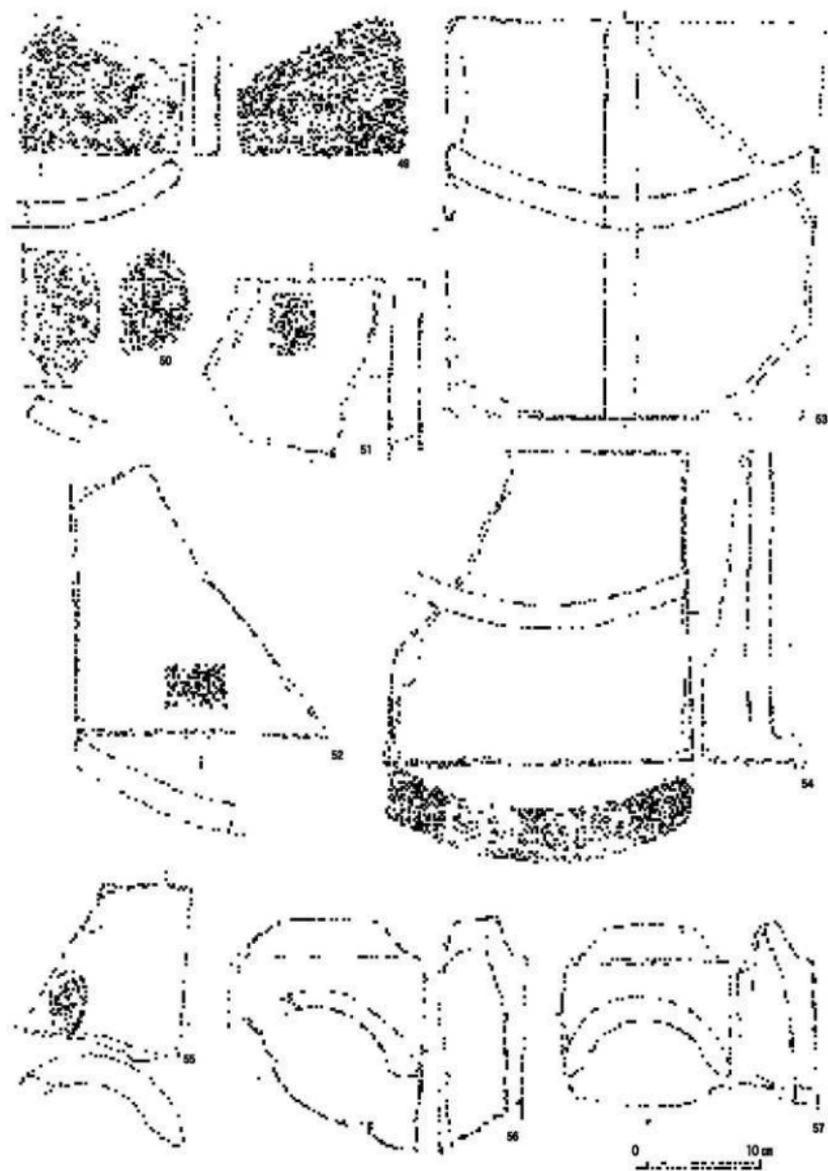


図49 各トレンチ出土遺物実測図2(1/4)

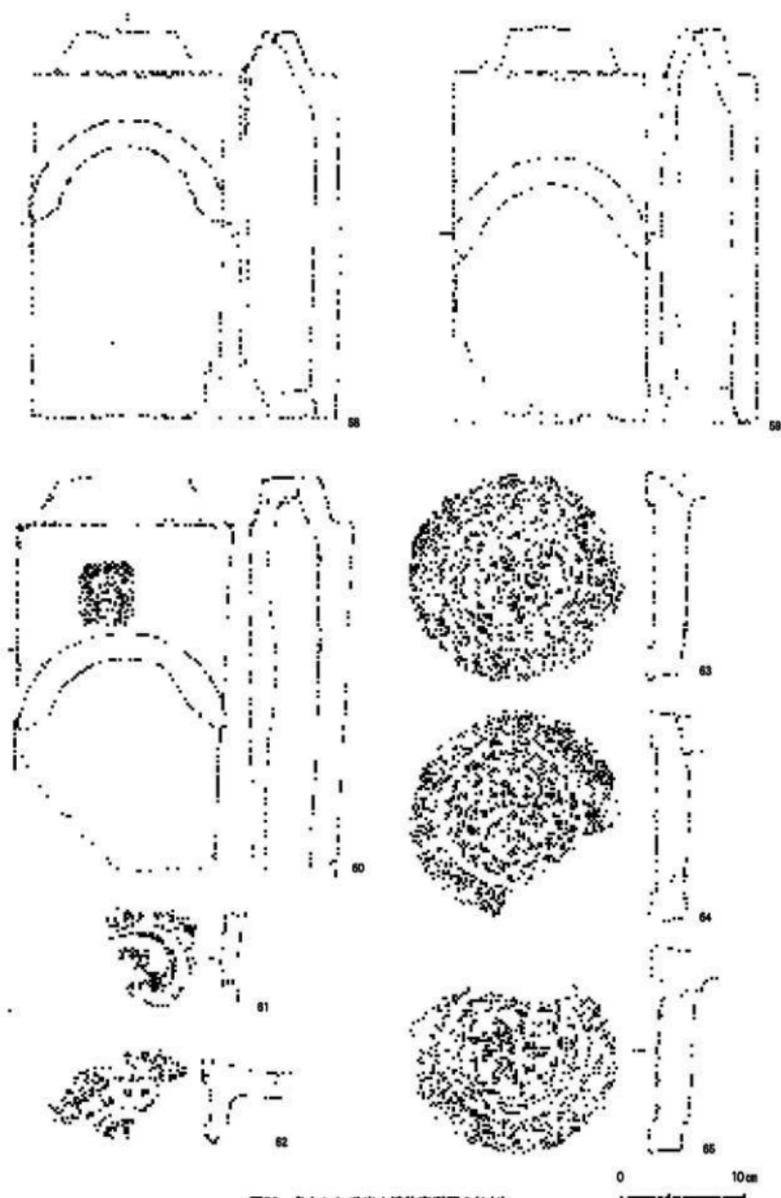


図50 各トレンチ出土遺物実測図3(1/4)

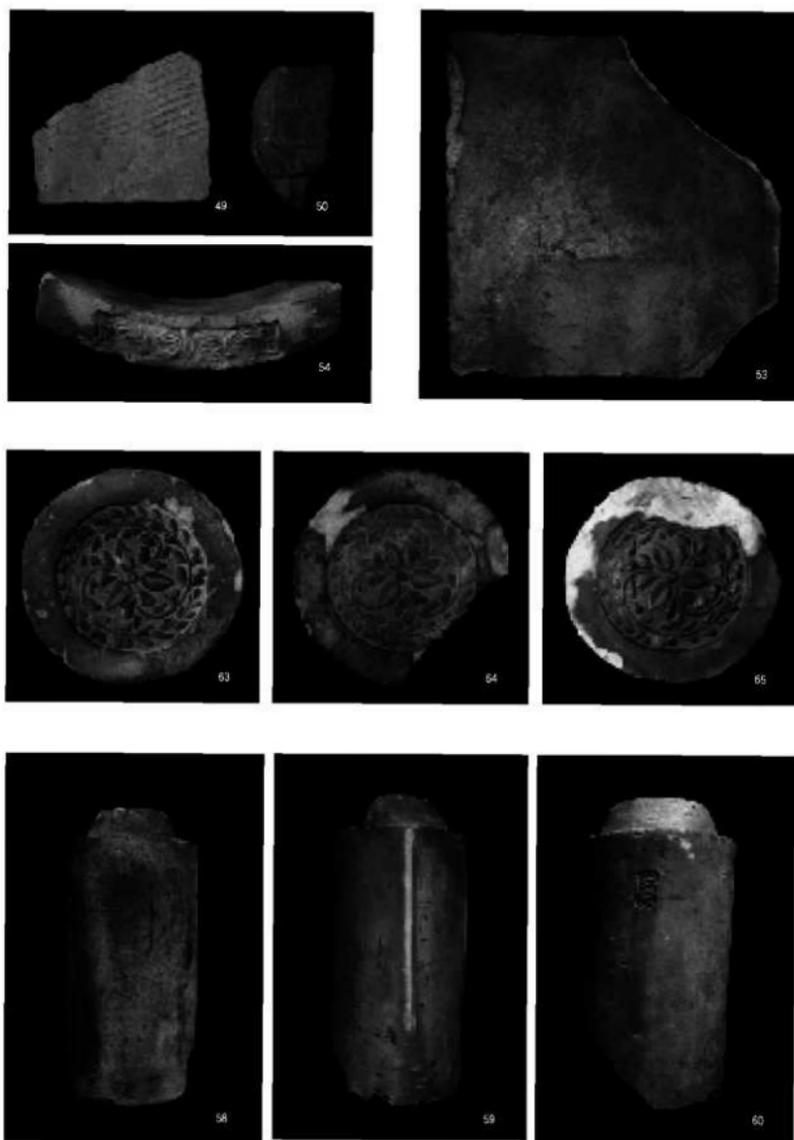


図51 各トレンチ出土遺物2(1/4)

14cm。取っ手の径は3.4~4.2cm。46は、旧陸軍の星章「☆」が入った磁器製丼碗。外底見込みにスタンプによる「肥2」の銘がある。昭和16年~20年に施行された生産者表示記号または統制番号と呼ばれるもの。48は素焼きの七輪。復元径26cm。49・50は古代の平瓦片。格子目叩き痕を残す。51~53は近世平瓦。いずれもおおぶりの瓦で、53の長さ・最大幅は32.3・30.3cmを測る。51の凹面中央には印判(楕円に十文字)、52には「八」または「ハ」を線刻。54は軒平瓦で、内区は藤三葉を中心飾とし、花房を左右に配する。内区の幅・高さは14.8・2.6cm。正面右に「今宿又市」の印判がある。55~60は丸瓦。いずれも先形品で長さ32~32.3cm、最大幅15~15.3cmを測るもので、背部は丁寧なヘラナデが見られ、谷部に布目痕がある。縁辺の面取りは丁寧である。55と60には背部中央に「新左衛門」・「口(惣か)右衛門」の印判がある。61~65は軒丸瓦瓦当部である。61・62の瓦当飾は三巴文である。62の尾部は長く、珠文の配列も密で古式をとどめている。63~65は三葉藤巴文で、同範である。範径は11.9cm前後。中心飾は三葉、花房は19個数えられる。

(5)小 結

今回の調査は、追廻橋東南部に位置する壱端の石垣の有無と平面形状の把握を主たる目的として調査を行った。その結果、標高1.5~1.6mほどの面で石垣上端を検出した。現在の水位(標高2.4m前後)からみると、石垣上端は約1mほど低いが、石垣の遺存状況とこれまでの肥前堀や中堀の調査事例から考えると、崩落した可能性が高いと思われる。石垣の平面ラインは、第1トレンチにおいては緩やかな屈曲部があり、第2トレンチへ連続することがわかった。図42に復元推定ラインを示した。

江戸期から近代に描かれた当該地区の絵図を参考にするに、第1トレンチから北西方向への石垣の延長線は、鉄物櫓石垣南西部から追廻橋の橋台部あたりへ続くと考えられ、『福岡城絵図』に見られるような緩い「S」字カーブを描いて東側内堀へ続いていたことが想定できる。ただし、築造当初の石垣および平面ラインであるか否かについては、未確定である。

調査上の制約もあり、確認された石垣の築造年代の比定や、石垣の基礎や構築方法、裏込めの状況など十分把握できなかった。今後の周辺石垣の調査を行う上での検討すべき課題としたい。

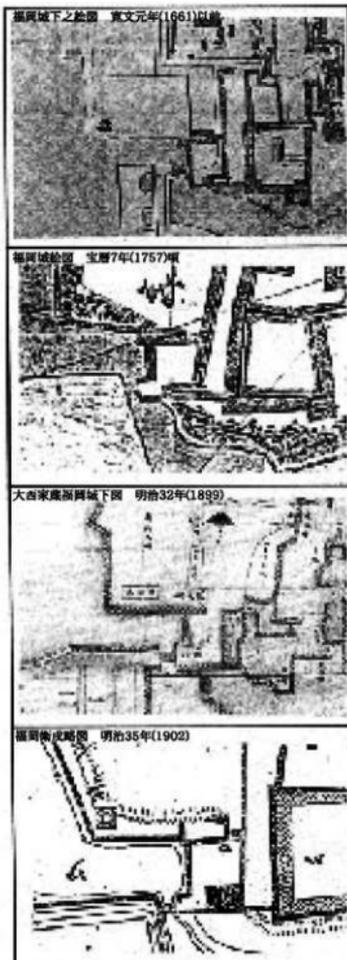


図52 絵図にみる追廻門周辺

第Ⅲ章 福岡城跡第46次調査

1. はじめに

(1)調査に至る経過

当該調査地については、平成12年12月27日付けで中央区大名2丁目443・444-2番地における商業ビル建設にかかる事前審査願いが埋蔵文化財課事前審査係に提出された。

当該地は福岡城跡より東方に延びる「福岡城中堀」の延長上にあたり、工事の設計変更を含めた協議を行っていたところ、翌平成13年2月7日付けで西側に隣接する同大名2丁目438番地においても駐車場建設にかかる事前審査願いが提出されたため、中堀石垣部分の保存にかかる両者との協議を行った。

その結果、設計にあたっては杭工事などの構造物を石垣部分からはずし、石垣前面及び裏込めの状況の把握のための調査を行うこととして、両対象地を平成13年2月27日から同時に調査を開始した。

調査は、石垣前面の露出後、平面図・立面図・断面図等の作成、石垣背面の裏込め調査後、平面図・断面図の作成、遺構の全体写真・個別写真の撮影を行い、同3月31日に調査を終了した。調査面積は、166㎡を測る。



図53 調査地点図(1/4000)

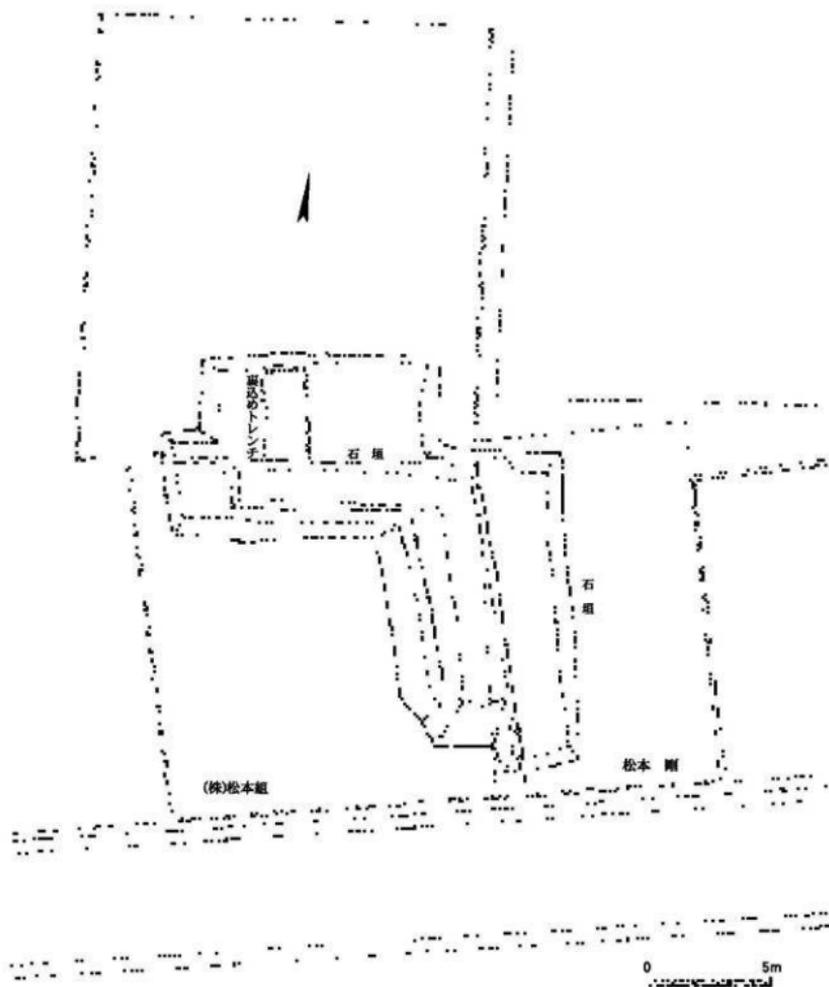
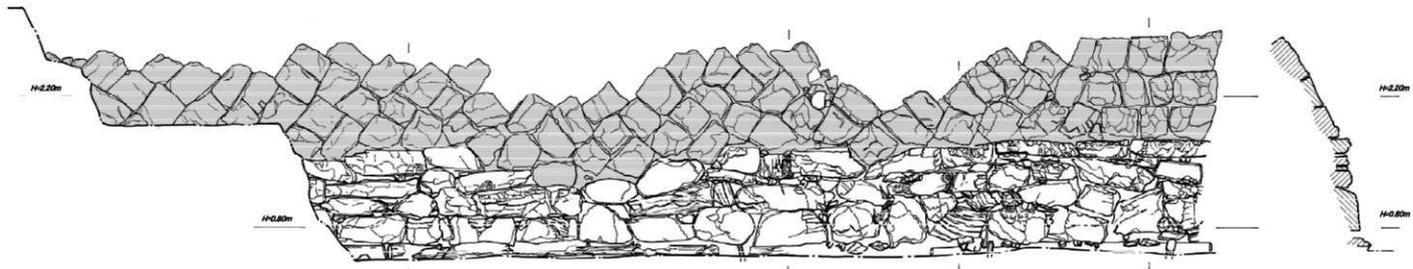


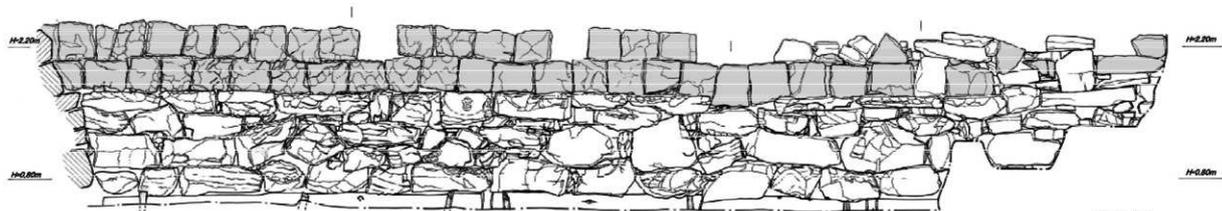
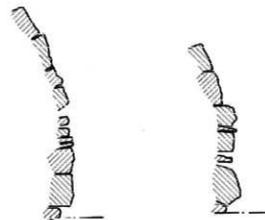
図54 調査区全体図(1/200)

調査成果は、文化9年(1812)記録に見られる中堀・肥前堀の石垣の改修記録や城絵図に見られる形状にほぼ一致する。

原因者	申請地	面積(m ²)	審査番号	受付日
松本 剛	中央区大名2丁目443・444-2	130.86	12-2-800	平成12年12月27日
(株)松本組	中央区大名2丁目438	476.63	12-2-891	平成13年2月7日



(東西石塚)



(南北石塚)



図56 東西および南北石塚側面・断面実測図(1/40)

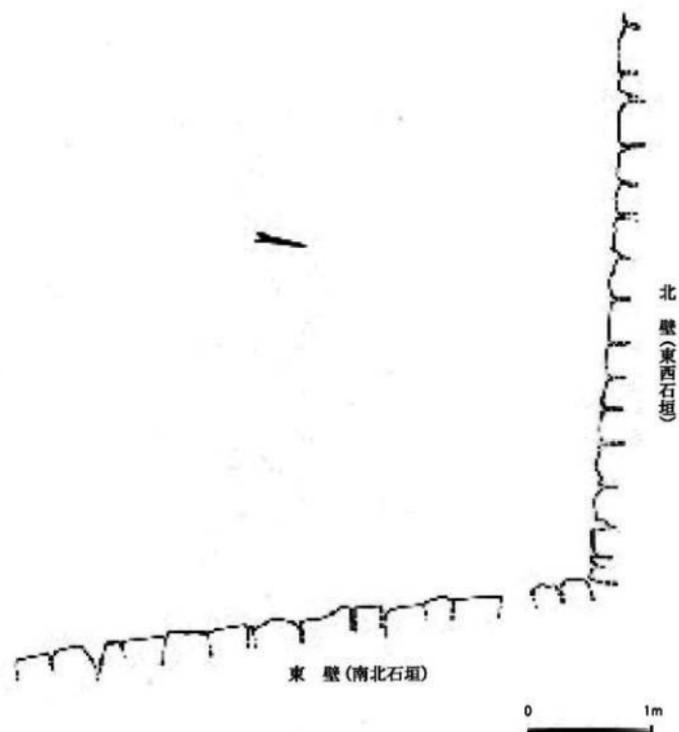


図56 東西及び南北石垣平面図(1/40)



図57 石垣角縁(西から)

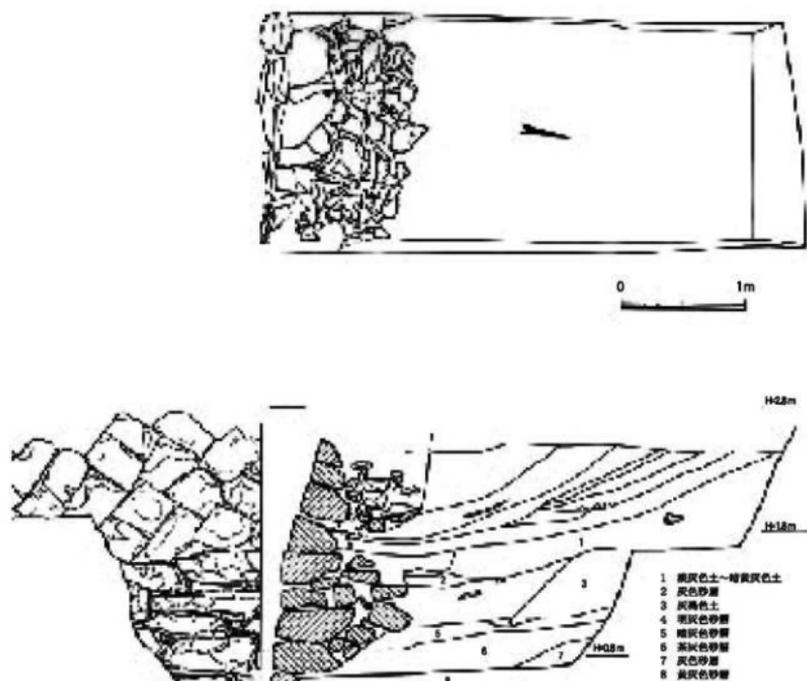


図58 風込め部調査トレンチ実測図(1/40)



図59 調査トレンチ(南から)

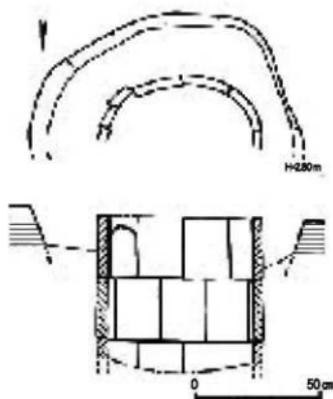


図60 SE01井戸出土状況図(1/20)

(2)調査の組織

調査原因	商業ビル、駐車場建設		
調査面積	166㎡		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課		
調査総括	文化財部	部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課	課長	山崎純男
	調査第2係長	力武卓治	
調査庶務	文化財整備課	管理係	宮川英彦
調査担当	事前審査	田中寿夫、加藤隆也	
	調査第2係	横山邦雄、常松幹雄	
調査作業員	大塩 皓、松末香織、一宮義幸、三好道子、山田ヤス子、高橋茂子		
調査補助員	坂口剛毅、名取さつき		
整理補助	副田則子、花田友美子、松田弘子、八代和美		

2. 調査の記録

(1)堀石垣の調査(図53～59)

今回調査の地点は、福岡城中堀北側の入隅部分に相当する石垣である。調査は、試掘調査によって知り得た石垣天端の延長線をもとに、石垣前面と背面に沿ってほぼ平行な調査区を設定した。石垣は表面舗装と基礎土等を除去した地表下60～80cm程度で上面を検出し、石垣前面に平行する幅1.3～1.5mの調査区で全高で1.8～2.1m程度の残存を確認した。また、入隅となる石垣の東壁(南北壁)は延長で約14m、北壁(東西壁)を約9m確認できた。両壁は、文化期の石垣に後世の積足しが見られ、使用

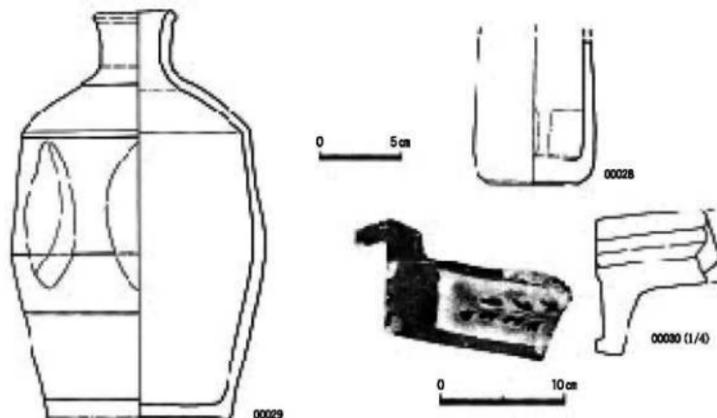


図61 裏込めトレンチ内出土遺物実測図(1/3・1/4)

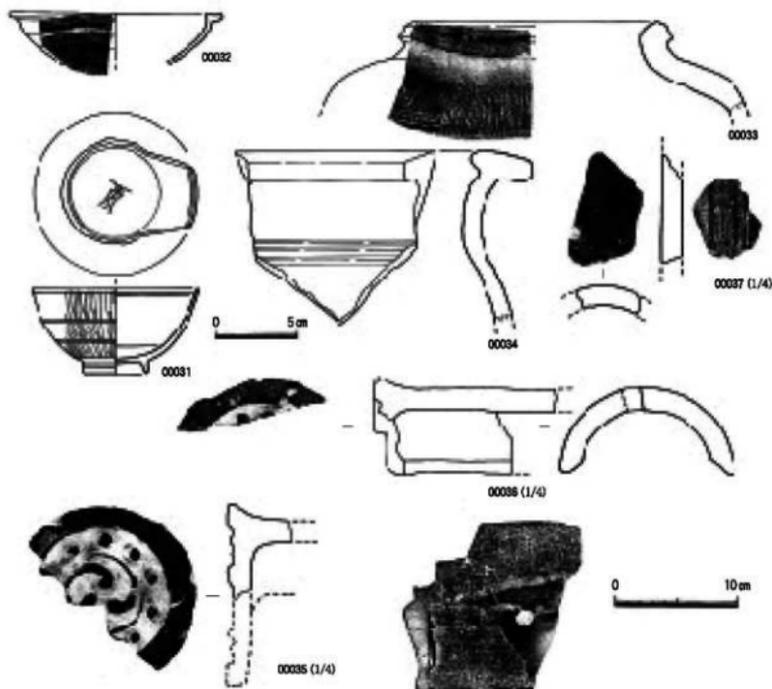


図62 墓込めトレンチ壁地層出土遺物実測図(1/3・1/4)

された石材も当初石垣は殆どが玄武岩で、一部に花崗岩を含んでいる。また、後世石垣は全てが姪浜周辺を産地とする脆い砂岩を使った検地石を使用している。なお、石垣は入隅の石材の組み合わせ状況から北壁(東西壁)が先ず築かれ、これにすりつけるように東壁(南北壁)が積まれる。

東壁(南北壁) 東壁では後世石垣の天端から約2mを掘り下げ、石垣基部に達した。石垣は天端から二石までは近代の積足しである。文化期石垣は、ほぼ高さ1.1mを測る。その構築には基部の黄灰色砂層上に径20cm、長さ4m程の松の丸木材を胴木として連続して敷き、両端及び中央部近くには固定のため径10～15cm程度の杭が打たれている。このあと胴木の上に長さ90cm前後、厚さ40cm程度のやや大振りの玄武岩の長方形角礫を腰石として載せ、さらに2～3石を積んで壁を造っている。また、天端には長さ60～90cm、厚さ20～30cmの薄手の角礫を水平に載せ化粧石としている。また、石垣の石材の上部縁には石刀による打削調整が随所に見られる。なお、基部の石材の隙間には瓦破片が多く詰められている。

北壁(東西壁) 北壁では後世の変更が見られ、中央部で天端の石材が失われている。文化期石垣の構築法は東壁と同様であり、径が10～15cm、長さ3～3.5mの松の丸木を胴木として使用する。高さも1.1mと東壁と同規模である。天端の標高は、海拔1.6mを測る。なお、後世に積み足されている上

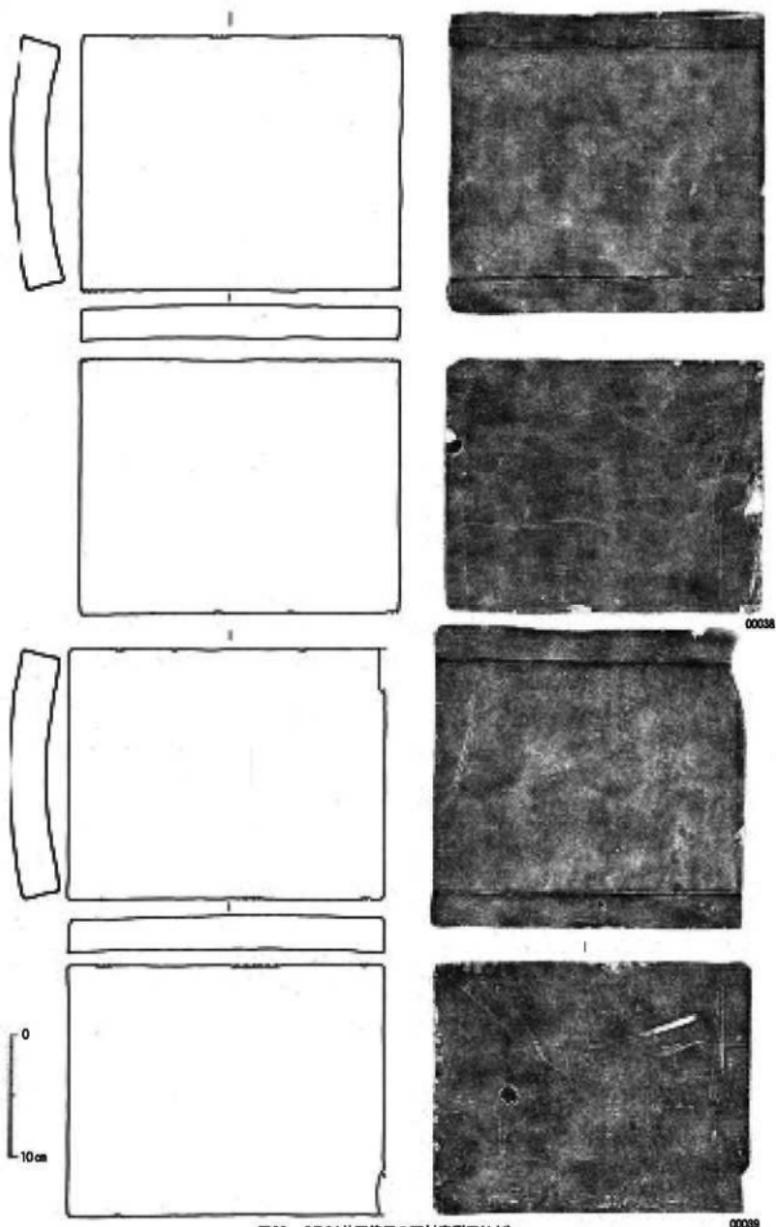


図63 SE01井戸使用の瓦材質実測図(1/4)

部3段程の石垣は、全て砂岩を使用しており、煉瓦積みや検地積みなどの手法が見られ、隙間にはモルタルや漆喰が充填されている。

(2)石垣裏込め部の調査(図58、59)

石垣背面の構築状況を確認するために東壁と北壁側ともに調査区を広げて検出にあたった。しかし東壁側では積足された石垣の時期に相当する可能性のある後世の建物基礎により背面が破壊を受けていたため、北壁側の調査区に限定して掘り下げを行った。

北壁調査区は、石垣に直交方向に設けた幅2m、長さ4.5mのトレンチである。石垣の背面には新しい時期の擾乱坑も見られるが、文化期石垣の裏込め状況を観察できる。断面図では石垣材の天端から4石までが後世の石垣であり、これ以下が当初の石垣である。当初石垣の裏込めには、径が20～30cmの玄武岩角礫や円礫を石垣背面から約60cm幅で投入している。ここで背面の土層状況を見ると文化期の石垣構築と関連する堆積土は1層の淡灰色土(北側では暗黄灰色へと変化)以下であると考えられる。また、石垣への改修前は土手であったことを考えると3層の灰褐色土は土手の一部であり、これ以下の4層(明灰色砂)・5層(暗灰色砂)・6層(茶灰色砂)・7層(灰色砂)・8層(黄灰色砂)などは土手の基底部であった可能性は高いと思われる。

(3)互井戸(図60・63)

石垣北壁の背面調査区で検出した井戸である。ほぼ南半分を調査した。井戸は、掘り方が径1.1m程度の不整形円形を呈し、中央に瓦を使用した内径60cm程度を測る井筒を備える。標高は、掘り方上面で2.65mを測る。使用瓦は、縦25.8cm・横20.8cm・厚さ3cm程度を測る定型的なものである。

(4)出土遺物(図61～65)

裏込めトレンチ内出土遺物(図61・62)

陶器 00029は、口縁が小さくしまり、肩部が張り、底部の大きな高取焼の壺である。胴部外面・口縁部内面に白色・灰緑色釉を掛ける。胴部中位には縦半月状の窪みが2対施される。口径4.9cm、器高25cm、底部径11cmを測る。整地層出土。00032は、跳ね上げ状の平坦口縁をもつ碗である。内面には淡褐色、外面一部に明褐色釉を掛ける。また、胴部下半に飛びカンナを施す。口径12.8cmを測る。整地層出土。00034は、端部のやや垂れる中型壺口縁である。口縁上端に目跡が2ヶ所見られる。内外面ともに褐～やや緑を帯びた釉を掛ける。頸部に複条の沈線を施す。復元口径45cm程度か。整地層出土。00033は、口縁のしまった甕である。やや肩部が張る。外面は暗茶褐色～黒色、内面は黒色の釉を掛ける。また、外面の口縁下には横方向のタタキ後に縦のタタキが残る。復元口径16cm前後。胎土は赤褐色を呈し、大粒の石英砂を多く含む。整地層出土。

磁器 00028は、青磁器花瓶か。胴部外面及び内面上半に分厚くやや緑色を帯びた青色釉を掛ける。胎土は白色で黒色微粒子を少量混入する。底部径は、5.3cmを測る。整地層出土。00031は、白磁染め付け小碗である。外面に三段の雷文?、外底に「青」?が描かれる。口径10cm、器高5.2cmを測る。整地層出土。

瓦類 00030は、黒餅文の軒平瓦である。胎土は、灰白色で石英砂を少量含む。また、器色は灰黒色を呈し、焼成は良好である。整地層出土。00035は、巴文軒丸瓦である。外区珠文は10個を配する。復元径16cmを測る。整地層出土。00036も巴文軒丸瓦である。胴部に釘穴を穿つ。整地層出土。00037は、丸瓦破片である。小破片であるが、外面に「今宿三右衛門」のスタンプが残る。整地層出土。井戸使用瓦(図63)

00038・00039は、定型化した井戸瓦である。端部はヘラ切りで、上部平面はヘラナデ調整を施す。

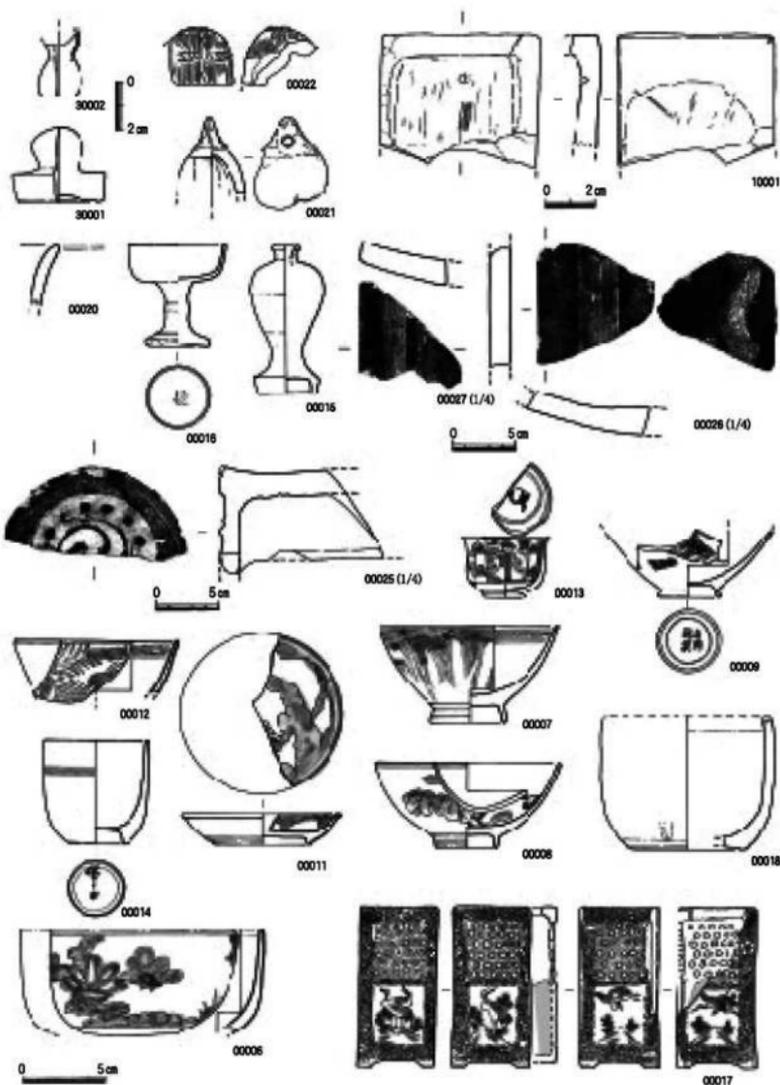


図64 堀埋土内出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)

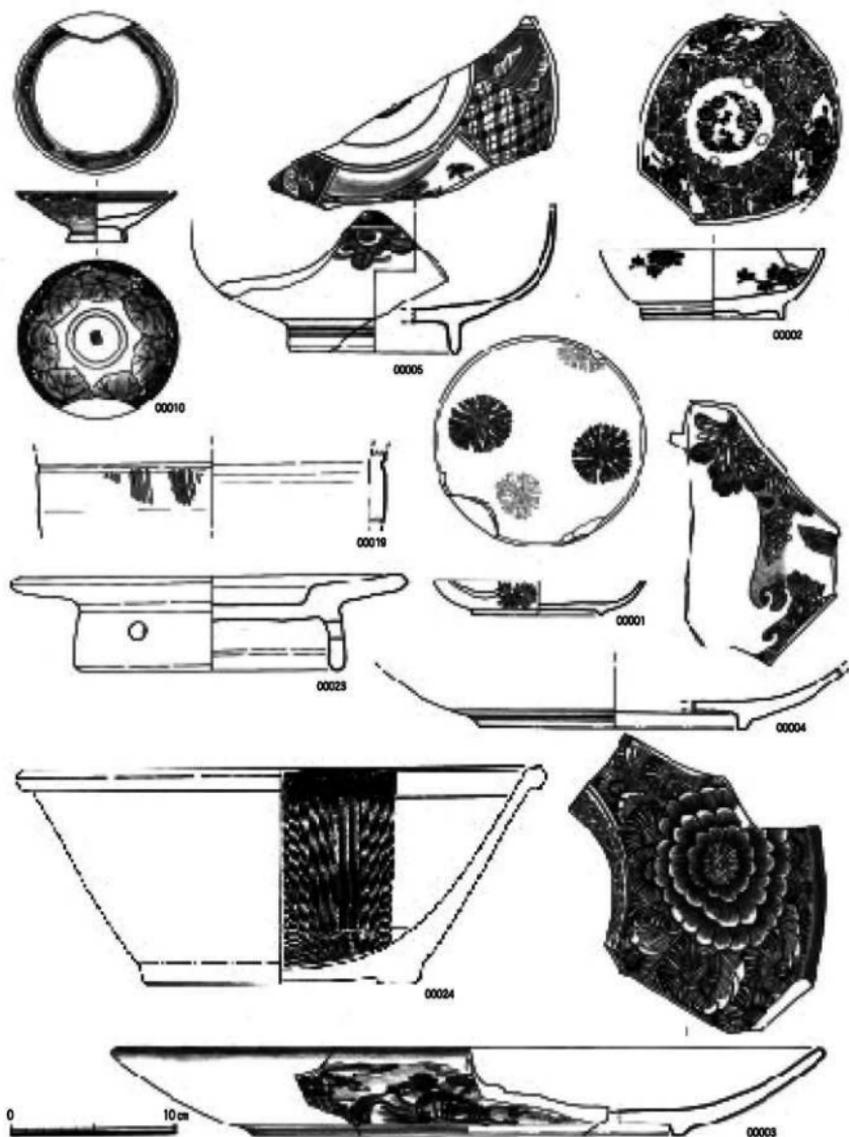


図65 福岡土内出土遺物実測図②(1/3)



図66 東・北壁石垣調査状況(南から)



図67 東壁石垣裏込め調査状況(西から)



図68 東壁石垣構築状況(北西から)

器色は、外面が灰色、内面が暗灰色を呈する。胎土には石英・雲母の細片を混入する。

掘埋土内出土遺物

(図64・65)

堀内の埋土からは埋め立ての際に多くの雑多な器物の破片が混入している。

30002は、ガラス製のミニチュア小瓶、30001も同製の容器蓋である。

また、00020は土師器壺の小破片である。器色は黄褐色で、胎土に石英・長石を多く含む。

00015は仏花瓶、00016は仏飯器か。いずれも肥前系磁器である。00022は土製人形頭部である。童子像か。00021は土鈴である。やや大振り、全体に扁平である。器色は灰白色を呈する。10001は小型の石製風字碇である。横幅は6.4cmを測る。凝灰岩製か。

00026・00027は平瓦破片である。内面に髷描きの条線文、外面に波状文を施す。00025は巴文軒丸瓦である。器色は暗灰色で、径15cmを測る。00012は磁器碗である。口径9.8cmを測る。00013は磁器猪口である。口径5.2cmを測る。00014は磁器湯飲みである。口径6.6cmを測る。00011は磁器高台付き皿である。口径9.6cmを測る。00007・00008・00009



図69 北壁裏込め調査区(西から)



図70 互井戸検出状況(西から)

は肥前系磁器碗である。00018は陶器碗である。00006は磁器鉢である。00017は、肥前系磁器の香炉である。外周や表裏に精緻な文様を施す。00019は高取系陶器の水差しか。00023は土師質土器である。また、000024は陶器播り鉢である。内面に重ね焼き痕が残る。この他に00005の碗、00002・00001の小皿、00004・00003などの大皿の様な肥前系磁器類が多く見られる。

3. 小 結

今回調査を行った福岡城中堀と肥前堀の改修については、文化十一年(1815)に書かれた福岡藩吉田兼年の勤事の記事として「・・佐嘉堀・中堀土留め石垣築立之儀御益筋申出、組之者召連残島江渡海、石漕込せ築出取懸り、去々年・去年見込通致出来、組之者江も能致帰服、御為筋出精相動候段、・・」(福岡藩「吉田家傳録 下巻」太宰府天満宮発行 昭和56年刊)の記録に見られる。

この文化八年(1812)に行われた改修では、従来、堀縁辺を土塁と堀側土手とで構築されていた堀の裾部を腰巻き状の石垣となす工事がなされたと思われる。

この中で、中堀の改修は、土塁の基底部端(土手裾)と考えられる黄灰色砂層を、幅約1mほど斜めに掘り込み、これの前面に松丸木の胴木を並べ、杭で留めてやや大振りの腰石を積む。石垣は基本的には腰石を含めて横長の礫を4段積みになっている。壁高はほぼ1.1m程度で、天端には、薄い横長礫を用い、化粧石としている。石垣の石面は石刀による打割で面を整えている。また、石垣の裏栗は少量で、幅も狭い範囲となっている。石垣および裏栗の材は、殆どが玄武岩の転礫を使用することが明らかとなった。この状況は先の記事の実際を示しているものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	ふくおかじょうあと15							
書名	福岡城跡15							
副書名	城内整備に伴う確認調査および中継の緊急調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1005							
編著者名	田中寿夫 横山邦雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	平成20年3月17日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
国史跡福岡城跡	福岡市 中央区城内5-2	40132	0193	33°15'7"	130°22'57"	1993.12.11 ～ 1993.12.21	80	指定地内 現状変更
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福岡城跡第24次	近世城郭	江戸時代	建物地溝跡 溝・柱穴	古代瓦・中国産白磁 肥前系陶磁器 近世瓦 土師器				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
市町村	遺跡番号							
国史跡福岡城跡	福岡市 中央区城内12.18-2	40132	0193	33°35'21"	130°22'45"	1996.3.1 ～ 1996.3.29	500	指定地内 現状変更
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福岡城跡第33次	近世城郭	江戸時代	城郭土塁	古代瓦 肥前系陶磁器 高取系陶器 近世瓦 土師器				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
市町村	遺跡番号							
国史跡福岡城跡	福岡市 中央区城内1-4	40132	0193	33°35'6"	130°22'49"	1996.6.21 ～ 1996.7.1	32	指定地内 現状変更
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福岡城跡第34次	近世城郭	江戸時代	城郭土塁	肥前系陶磁器 高取系陶器 近世瓦 土師器				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
市町村	遺跡番号							
国史跡福岡城跡	福岡市 中央区城内1-1	40132	0193	33°34'58"	130°22'54"	1997.8.18 ～ 1997.9.10	152	指定地内 現状変更
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福岡城跡第40次	近世城郭	江戸時代	城堀 腰巻石垣	古代瓦 肥前系陶磁器 高取系陶器 近世瓦 土師製焼物				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
市町村	遺跡番号							
福岡城外堀 (中継)	福岡市 中央区大名2丁目 438・443・444-2	40132	0164	33°35'17"	130°23'29"	2001.2.27 ～ 2001.3.31	166	個人専用 住宅兼店舗
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福岡城跡第46次	近世城堀	江戸時代	城堀 腰巻石垣	肥前系陶磁器 高取系陶器 近世瓦				

福岡城跡15

～城内整備に伴う確認調査および中継の緊急調査報告～
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1005集
平成20(2008)年3月17日

発行者 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 有限会社 西産
福岡市早良区次郎丸1-7-1